

あべこべ世紀末、転生先は地獄だぜ

abc2148

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれ変わった先は世紀末、無人兵器と生物兵器と無法者が跋扈する魔境

力なきものは利用され、蹂躪され、無為に死に絶える弱肉強食の世界

——あと男が弱くて女がメツチャ強いから

え、ナニソレ？聞いてませんよッ！

目次

人生が始まってから結構経ちました

エピソード1 | 1

エピソード2 | 5

ハッピーバースデー！

すべての始まりの日 | 9

前途多難 | 14

俺の名は…… | 19

ゲテモノ食い | 23

クラフトするなら先ずは素材を集めない…… | 27

虫の知らせという深読み | 30

最善だと考えたものが…… | 33

あなたは人ですか？ | 37

re・廃墟生活

彼女の変化した日常……？ | 41

味方、ゲットだぜ！ | 46

改造してみよう！ | 50

ソラ欠乏症 | 53

心の準備が…… | 57

ちよ、ちよい待ちッ！ | 61

さあ、一緒に帰ろう | 64

交わらないモノ | 68

ぶつかる | 72

窮鼠猫を噛む | 76

人の三大欲求は睡眠欲、性欲、そして食欲だツ！！

耐えられませんっ！

80

料理のために畑を作る

84

予想外過ぎるでしょ……

88

可憐な少女ソラちゃん

92

転機と呼べるもの

96

違法行為に関するホニャララ

100

少しでも回る歯車

105

人生が始まってから結構経ちました エピローグ 1

荒野が広がっている。

草木は一本も生えていない。

あるのは土と石、遠くには岩山が点在している。

命の息吹は此処には皆無、乾いた風が吹き抜け砂を巻き上げるだけ

——10分前までは

今や轟音が轟き、猛烈な勢いで砂塵が辺りに吹き荒れる。地面は絶えず震え続け、突如地面が爆ぜればクレーターが大地に刻まれる。その数は既に十を越えているが留まるところを知らない。

天変地異に相応しい現象、その現象は二カ所で——いや、二機の鋼鉄の機動兵器が生み出している。

一つは真紅の機体だ。全高10mもある人型の兵器は可能な限り無駄を削ぎ落としたフレームを中心に構成されている。武装は右腕に装備した盾を兼ねた実体剣、左腕に小型軽量の機関銃を装備する。だが最大の特徴は背部、腰部、肩部に接続された大型のスラスタード。真紅の機体は高機動性と格闘性能を重視して設計されている。大型スラスターが齎す推進力は機体を縦横無尽に飛ばし生半可な機体では視界に捕らえる事は出来ない。

もう一方の機体は灰色の機体だ。全高は8mと小さく、真紅とは違い洗練されたフレームではない。だが武装は目を見張るものだ。両腕にはガトリング砲、左肩部には大型の散弾砲、右肩部には近接信管を備えた多連装ミサイルコンテナ、また機体各所には追加の弾薬庫を装備している。

大抵の機体であれば重量過多によりまともに移動できないだろう。だが灰色の機体は重量を物ともせず荒野を移動し続けている。それを可能としているのは灰色の機体の脚部が四脚であるからだ。重量級の二脚に匹敵する脚が四つも備わった四脚は灰色の機体重量を難なく支え移動を可能にした。

真紅と灰色、二機の機体は荒野を舞台に戦っている。だがその内容は一方的なものだ。弾丸を、散弾を、ミサイルを。灰色の機体は持ち得る火力を真紅の機体一機に投入をする。狙われた真紅の機体はそれらをスラストを駆使して回避する。一発でも被弾すれば、わずかでも動きが鈍れば破滅する運命にあるのは真紅の機体だ。

真紅の機体は反撃の機会を見いだせず、反撃しようとするれば接近しなけれならぬ。だが灰色の機体は接近を許さない。引き撃ちをして繰り出すのは圧倒的な弾幕。真紅の機体では耐えきることは不可能だ。

灰色の機体の勝利は揺るがず、真紅の機体がスクラップになるのは時間の問題、この戦いを見た誰もがそう思うだろう。

——だが事実は全くの逆だ。

「当たれ当たれ当たれ当たれ当たれ当たれ——」

灰色の機体のコックピット、その中に搭乗するパイロットは叫びながらトリガーを引き続ける。網膜に投影されるレイトクルは真紅の機体を捉えるようとするがそれは叶わない。故にパイロットは機体の進路を予測して弾幕を張るしか出来なかった。それが戦闘開始から続いているのだ。

実際のところ追い詰められているのは灰色の機体だ。幾ら驚異的な火力を持っていようが当たらなければ意味はないのだ。だからと言って正確に狙いを付けようとするれば隙を突かれる。

相手は高機動で格闘戦に特化した機体。対して四脚の機体は射撃に特化した機体、格闘戦など想定していない。真紅の機体に格闘戦に持ち込まれでもしたら一方的に倒されるしかない。

だからこそ灰色の機体は距離を保った状態で圧倒的な弾幕を展開し圧殺するしかないのだ。余裕などない、それしか勝ち筋がないのだから。

だが現実には非情だ。スラストが生み出す推力で悉くを躲し続ける真紅の機体。それを理解しながらも灰色の機体は絶えず弾幕を張り続ける、張り続けるしかない。

そして限界が訪れる。

「ッ、弾切れッ！」

網膜に映し出されるのは残弾ゼロの表示、耳には警告音が絶えず響き渡っている。可能な限り拡張した追加弾倉も使い切ったのだ。

残されたのは何の反撃手段も持たない鉄塊。そして灰色の機体のパイロット、その耳に通信が、声が届く。発信先は真紅の機体だ。

「今から迎えに行くよ」

真紅の機体が動き出す。スラスターを全開に吹かし急速に接近する。

「クソッ！」

灰色の機体は残弾0の武装を急ぎパージする。少しでも機体重量を軽くし、なけなしのスラスターを吹かして逃げ出す。例えば最後の悪あがきだとしても。

「逃げないで」

だが結局のところ無駄な行動でしかなかった。真紅の機体は容易く灰色の機体に追いついた。そして右腕に装備した実体剣を展開し振り抜いた。

・警告・脚部左後脚信号途絶、大破しました

真紅の機体が再度振り抜く。

・警告・脚部左腕信号途絶、大破しました

・警告・頭部信号途絶、大破しました

・警告・脚部左前脚信号途絶、大破しました

・警告・姿勢制御、現状維持困難、転倒します

灰色の機体が機体を傾け倒れる。残った運動エネルギーが地面を削りながら機体を進ませ、止まった。

・警告・戦闘能力0、直ちに機体を破棄、脱出してください

・警告・戦闘能力0、直ちに機体を破棄、脱出してください

・警告・戦闘能力0、直ちに機体を破棄、脱出してください

コックピットの中は赤色灯で真っ赤に染まる。だがパイロットは警告を受けながらも動かない。なぜなら転倒の衝撃をもらに受け意識を失ったからだ。

「つかまえた」

誰も聞き届ける者がいないコックピットの中で、喜色に満ちた声が響いた。

エピローグ2

「知らない天井だ」

そう言つて男は目を覚ました。如何やら上等な寝具の上で寝ていたらしく寝起きは非常に気持ちの良いものであった。

そして横になっていた状態から起き上がり辺りを見回す。どうやらそこそこ大きな部屋らしく、いくつかの調度品が置かれている。派手過ぎず、かと言つて地味なものではないそれらは一目で高級なものだとわかる。

そんな事を考えながら男は部屋を見渡していく。そして頭が本格的に活動を始めると共に部屋の異常に気が付いていく。

「窓がない……」

部屋には窓が一つもない。そして大して広くもない部屋を調べれば異常な点が直ぐに見つかる。

「監視カメラ……」

天井の四隅には監視カメラがあった。部屋の全体をカバーするように設置され、部屋の中に死角は無い。そして何を監視するのか、その目的は、その答えは簡単に出せた。

「ここは牢屋か」

そして監視対象は間違いなく男だ。つまり男は今現在囚われているのだ。

そして非常に……、誠に……、全くもつつつって不本意であるが男にはこのような事を行う人物に心当たりがあった。

「どうやら目が覚めたようだね」

そして丁度よく件の人物が部屋にある唯一の扉を開け入って来た。輝く金色の髪、透き通った空色の瞳。誰もが心奪われるであろう美貌を持つ女が男の前に現れる。

「シルヴィア・アークライト……」

「そんなに警戒しなくてもいいよ」

そう言つて女、シルヴィアは男に歩み寄る。だがシルヴィアが一步踏み出すたびに男は一步下がる。それは男が目の前の相手に警戒し

ているからだ。

「記憶が確かなら機体を切り刻まれているんだけど」

「それは済まなかった。だけど君が悪いんだよ、僕の招待を受けなかったんだから」

男は後ろへと下がりがながらも嫌味を口にする。だが言われた当人は軽く受け流し歩調を変えずに男に迫る。そして男の膝裏にさつきまで寝ていたベッドが当たる。勢いを殺しきれなかった男はベッドの縁に座るような体勢になってしまった。

そんな男の姿を見たシルビアの笑みが浮かぶ。それは漸く探し求めていたものが手に入ることへの歓喜だった。だがそれだけでは満足出来ない、出来るはずがない。目の前にいる男の顔には様々な感情が浮かんでいる。それは怯えであり、嫌悪であり、だがそこには諦めるといった感情は無い。

ああ、その顔を歪ませたい。自身に赦しを乞うように躡を施し、跪かせ、その心を染め上げ支配したい。胸の内より湧き上がる歪んだ欲望に従いシルビアは男に一步、また一步と近づいていき……………

「だからと言って誘拐が許されるかッ！」

突如視界が白に覆われる。

なんてことはない、男がベッドのシーツを引きはがし投げつけただけの事。だがこれが男が待っていた瞬間であった。

全身の筋肉をバネの様に躍動させ立ち上がった男は走り出す。目指す先はシルビア……………ではなく、その後ろのある開け放たれた扉。それこそが男がこの牢屋から脱出する唯一の道だ。

だがシルビアの横を通り過ぎようとしたところで歩みは止められる。

「悪いが君を逃がすつもりはないよ」

感情のこもらない、冷たい囁きと共に後ろに振りかぶった腕が捕まれる。それだけに留まらず即座に腕をねじり捻る事で男の腕に激痛が走る。痛みによって動きが止まった脚を払いシルビアは男を取り押さえる。

「う、ああ……………」

「さて君は何処に行こうとしてるんだい」

倒された痛みには呻く男を見下ろしながら詰問する。男がシルビイアから逃げ出そう藻掻くが拘束が緩む事が無い。それ以前にこの世界において男は女には勝てないのだ。よって最早脱出は不可能でることとは誰の目から見ても明らかだった。

「取り敢えず此処から出させてもらえない？」

「ふふ、それは許可できないよ。だけど安心してくれ、ここにいれば衣食住の全てを保証してあげるよ」

「代わりに首輪を付けねば……だろ。いい加減分かれよ、俺がアンタを受け入れることは万に一つもない」

だが男は諦めが悪い。減らず口を叩きながらも視線は動かし続け脱出の糸口を探し続ける。だがそのやり取りさえ楽しいのかシルビイアの顔には笑みが浮かんでいる。

「そうだね、君には何度も振られてしまった」

「なら……」

「強引な手段であることは理解している。君の意思を無視して此処に閉じ込めているのも分かっている。それでも諦めきれないんだ。君が欲しい。欲しくて欲しくてたまらない。初めて出会った時とは違う。遊びなんかじゃない、本気で君のすべてが欲しいんだ。だから……」

シルビイアは取り押さえた男の耳に口を寄せ呟く。

「あらゆる手段を使っても、必ず私色に染め上げてあげるから」

「どんな外道な手段を使うつもりなんだ、テメエはッ！」

最早そこにいるのは一人の男に狂った女だった。

「諦めて僕のモノになれ」

「絶対にごめんだッ！」

男……ソラは叫ぶ、叫ばずにはいられない。どうしてこんな事になっちゃったのか。

目覚めた先に広がっていた世界は世紀末。無人兵器と生物兵器と無頼者が跋扈する魔境。

そして男よりも女が強いという事実が作り上げた女尊男卑が罷り

通る社会。

その生まれてしまった自分。

もし神様がいるなら教えてください。いつたい俺は何をやらかしたらこうなるんだよ！

だが神が答えることはない、そしてこれから始まるのは数奇な世界に生まれ落ちた男の七難八苦の物語である。

ハッピーバースデー！
すべての始まりの日

目の前には暗闇が広がっている。

視覚が全く機能していない闇の中、その中にいるのは一人の少年。色白の肌に艶やかな黒髪の短髪を持つ少年は幼く、しかしその眼だけが異彩を放っている。焦点が合うこともなく何も見ていないような伽藍洞の目。見る者に不安を抱かせるような容姿をしている少年はまるで人形のようなだった。

だがそれも仕方がないことだった、なぜなら少年には自我なんてものはないからだ。

少年には過去がなく、経験がなく、そのくせ分不相応の知識だけが脳に刻み込まれた不自然な存在だ。故に何をするかもわからず只目覚めてからというものの感情もなく周りを見つめることしかしてこなかった——周りを行きかう言葉が何を意味するものかも知らずに。

そして現在、目覚めてから幾許かの時間が経過した今、少年は自我というものを構成しようとしていた。とはいっても突如として自我に芽生えた訳ではなく脳に刻み込まれた知識を骨格にした自我は薄く、外部からの刺激に僅かな反応を返す程度だ。

それでも目覚めた時と比べれば雲泥の差であり、少年は感情を欠いた頭脳で情報収集を行う。そうすれば視覚以外の五感から様々な情報を取り込めた。

埃っぽいおいに乾燥した空気、それに加えて何かしらの音も聞こえて——

「本日の目玉商品はこの小さな少年デース！」

突如として暗闇から勢いよく光が差し込んできた。それだけでなく視覚以外の五感からも先程とは比べ物にならない程の情報が流れ込んできた。

これが感情を持った人であれば事態の急変についていけず呆然としていただけだろう。だが自我が限りなく薄い少年は冷静に情報を整理

して現状を理解しようと試みた。

そして理解してしまつた、今の自分はオークションに出品——分類としてはペット兼奴隷という最低最悪のもの——されていることに。

その事実を理解した少年の頭脳は見びき出した結論は一つ——これは非常にまずい事態なのでは？

しかし知識だけが先行して導き出した結論に対して少年の反応は鈍いもの、感情が欠けた状態では結論に対しての評価が上手く出来なかつた。

「用途は様々！遊びもよし、薬漬けにして壊すもよし、切り刻むといったサイコな用途にも扱えます！」

一通り謳い文句は言い終わつたのか、会場の彼方此方から数字を告げる声が挙がる。

10000、20000、50000、100000、560000、1000000……

入札価格は留まることなく上昇していき、それに伴い会場には熱気が満ちていく。その様子を冷めた目で見ながら少年は詰め掛けている人々を見回す。

体中にタトウーを刻み込んでいる人、明らかに危ないお薬をキメて目が血走っている人、果てには武骨な銃器を体中に抱えた人。野蛮人、無法者、蛮人、危険人物、といった言葉を体現したような人ばかりが狭苦しいオークション会場に詰め掛けていた。そんな彼らが一心に見つめているのが自分だと認識した少年は背筋に何とも言えない感覚を味わう。

だが感覚を抜きにしてもこれは非常に危険な状態であることは間違いない。だがどういつた目的で自分を買おうとしているのか、それが皆目見当が付かない少年は徒に背筋を這う感覚を味わうしかなかった。

「250万！」

「300万！」

「300万いただきました！これ以上のお客様はいますか？いないようで36番のお客様が落札しました！」

そして熱狂に包まれた競売も終わりを迎えた。300万という価格が余程嬉しいのか司会者の女は満面の笑みを浮かべながら少年を連れて舞台袖へと歩いていく。スポットライトが当たる会場とは違い薄暗く埃っぽい舞台裏、そこには一人の人間のようなものがいた。脂ぎった顔を厚化粧で覆い隠したような醜悪な顔に、頭から下は境目がわからない程の肥満体系、辛うじて性別は女だとわかるのは毛深くないからか。一言では言い表せない程の醜悪な人間が少年を血走った目で見つめ舌なめずりをしていた。

ここでようやく少年は背筋から感じる感覚の正体が分かった。それは恐怖であり、耐え難い嫌悪、得てして本能に由来する負の感情であった。

そして理解せざる得ない、これから先に待ち受ける所業を、自身が地獄の入り口の一步手前に立っていることに。

感情を獲得した少年は自らが持つ知識を総動員する。目的は現状からの逃走、だが視線を動かして得られた情報は無情にも逃走は不可能だと告げる。会場の至る所にいる銃を持った職員、それに加え会場には数多くのならず者達が今も詰め掛けているのだ。

最早少年の運命は此処まで。現状で可能なことは速やかなる自殺を敢行しこの先に待ち受ける未来から逃避する事しか残されてはいなかった。だが自殺のための道具を手に入れる事も叶わず、破滅へと向かうしかなかった。

一步進めば鼻が曲がりそうな異臭を嗅覚が感じ取り、二歩進めば濁った吐息を聴覚が拾う。鳥肌が立ち、踏み止まろうとすれば司会者である女が力尽くで移動させる。

諦めるしかない、沸き立つ負の感情を感じながら少年の人生は此処で終わりを迎える

——ことにはならなかった。

運が良かった。若しくは悪運に恵まれたのかは分からない。

突如として足元が大きく揺らぐと同時に爆発音が響き渡る。あま

りの揺れの大きさに少年を含めた誰もが地面に転がり、それに遅れて会場のか外からけたたましいサイレンの音が鳴り響く。それはオークション会場の隅々まで響き渡り、俄かに会場が騒がしくなっている。

少年を競り落とした女も司会者の女も表情を青くしながら急いで駆け出していく

——少年を置き去りにして。

「なにこれ、どうゆうこと？」

突如として舞い込んだ自由、あまりの事態の急変に対応できなかった少年は呆然とする。だが再度起きた爆発音で我に返ると即座に移動を開始、人目に付かないように隠れながら舞台裏を移動していく。

暫くするとオークションを出た少年が目にしたのは大広間のような空間に集まっている人々だった。どうやら司会者を中心として武器を持った人達が簡易的なバリケードを築き始めている所であり、籠城戦を行う構えを見せていた。

それは最悪な展開といえるだろう。籠城戦が成功してしまえばオークションは再開され、落札された少年は今度こそ売り払われる。そこに少年の意思が介在する余地はなく、抵抗すら許されないだろう。そうならない為には別の通路を使って逃げる必要がある。少年は急いで別の通路を探し出そうとするがそれらしいものはバリケードを築いている通路しかなかった。

それでも他に通路はないかと少年は隠れながら必死に探し出し、見つけ出すことができた。

——大広間の壁の一角が盛大に爆発することによって。

轟音とともに壁が崩壊し、吹き飛ばされた瓦礫がならず者達を打ち据える。運が良かったものは生き残り、運が悪いものは身体を文字通り瓦礫にズタズタに引き裂かれた。

幸運にも少年は爆発の衝撃に会いながらも隠れていたお陰か怪我を負うこともなかった。それでも少なくとも痛みを感じる身体は思い通りに動かす事が出来ず蹲ったままだった。

だがそれが少年の命を救った。

壁から入ってきたモノは少年の存在に気付くことなく大広間に入っていく。生き残ったならず者達はその姿を見て恐慌状態に陥り、銃撃戦が始まった。銃撃と叫び声が響き渡る、それを痛みから回復した少年は見てしまった。

血走った目に太く大きく異様に発達した二本の腕、それを包んでいるのは金属質な毛皮を持つ怪物。銃弾を物ともせず、ならず者達に接近しては巨大な腕を使って殴り殺す。時に生きたまま噛みつき咀嚼していく。

身体を血で紅く染め、口を動かせばボキッと何かが折れる音を立てながら人肉を咀嚼していくその姿を見た少年は震えが止まらなかった。

「マジかよ……、夢なら覚めー」

と変なことを口走った少年だが最後まで言い切ることはなかった。なぜなら怪物が作った壁の穴を見てしまったからだ。

怪物は未だにならず者達の相手をし続け、その視線は少年をとらえてはいない。戦場と化した大広間では怪物を殺そうと未だに多くの銃声と、怪物が殺していく者達の悲鳴で満ちていた。

それは正に地獄の底に届いた一本の蜘蛛の糸。だがその細い糸は下手をすれば簡単に千切れて仕舞い、それ以前に糸にたどり着く前に巻き込まれて死んでしまう可能性もあった。

——それでも少年が生きる道はこれしかなかった。覚悟なんて大それたモノはない、勇気なんて陳腐なモノも持っていない。

ただ死にたくない、生きたい、少年の身体は走り出す、原始的な生存本能に突き動かされて。

前途多難

胸が燃えているかのように熱い、空気が粘り気でも持っているのか吐き出すことができない。それでも少年は自らの身体に鞭を打ちながら走り続ける。未熟な身体は既に限界を超えて悲鳴を上げる。しかし少年は脚を動かす事は辞めない。

——死にたくない

——生きたい

知識だけしかなかった頭の中には感情が、原始的な生存欲求に基づいた恐怖が芽生えてた。その感情が今にも倒れそうな身体をギリギリの所で支え——そして少年は建物の外へ出る事が出来た。

少年の眼前に広がっているのは灰色の空。今すぐにも雨粒が降り注ぎそうな分厚い雲が空を覆い太陽の光を遮っている。それが少年の初めて見た外の景色であった。

だが呑気に風景を鑑賞する時間は少年にはなかった。疲労困憊の体であるが周りから多くの音が聞こえてくる。会場でも聞こえたサイレンの音はより大きな音で辺りに響き渡り、その中には銃声と悲鳴、怪物の雄叫びが混じり、視線を空から地上に移せば沢山の廃墟が立ち並び其処彼処で閃光が瞬いている。

会場の外にも戦場は広がっていた、危機を脱していない事は一目瞭然だった。故に少年は息を整えるための最低限の休息をして直ぐに動き出した。

しかし少年に行く当てはなく、それ以前に自分がどこにいるのかすら分からない。逃げた先に何が待っているかも分からない。それでもあの会場の中に留まっていれば待っているのは確実な死であったことは間違いない。それならば待ち受けるのが同じ破滅だとしても、まだ悪足掻き出来る余地が残っている外のほうがマシだと結論を出す。

恐怖から始まった感情は少しずつ少年の頭蓋の中で花開く。恐怖を覚え、怒りを感じ取り、そして今喜びを少年は知りつつあった。この逃走の先には生存と自由と呼ばれるものが待っていると無意識に

期待していた。

しかし現実はその処まで甘くは出ていなかった。少年が手に入れようとする自由、その代価を取り立てるかのようには逃げる先に何かがあった。

少年の背丈を軽く超える大きさに細くも発達した四肢、口には鋭い牙が生え揃い唸り声を鳴らし、その背には生体部分から突き出るように生えた大型の銃器を背負っていた。

『量産型生物兵器警備七型』

頭の中にある知識が適切な情報を提示、その内容を理解してしまった少年は顔を青ざめる。

逃げられない、それが簡単に分かってしまうほど目の前にいる『敵』は強すぎる。もし適切な装備があれば――、そんな事を考えてしまいが現実はどうしようもなかった。仮に装備があつたとしても正面から戦えばたやすく殺されてしまう、それ程の隔絶した差があつた。

会場の外に偶々いたのに出くわしてしまったのか、それとも狙っていたのかは分からない。そして分かっていることは敵である生物兵器の目が少年を捉えているの事だ。

見つめられている少年は体中の血が凍ったのではないかと錯覚した。それでも此処で何かをしなければ殺されるしかない、金縛りにあつたような体を相手からは分からないように少しずつ動かす、視線を左右に動かして何がなかと動かす。物でもいい、人でもいい、この際会場にいたガラの悪い人でも構わない、まさに藁をも掴む気持ちで視線を動かす。

しかし残念なことに其処には何もなかった、誰もいなかった。非情な現実しか其処にはなかった。

そして生物兵器が動いた。

「ガアアッ！」

「ぴやあああああああつ?!」

生物兵器の生え揃った鋭い牙が少年の頭蓋を噛み砕こうとし――その噛みつきは空を切った。運が、もしくは悪運がまだ残っていた。腰を抜かして尻餅をついた少年の頭上を生物兵器が勢い良く通り過

ぎていく。そして怯えながらも目を瞑ることがなかった少年は通り過ぎていく敵を見て、すぐに逃げ出す。

再び灼熱に胸を焼かれる逃走が始まる。だが今回は追跡者が、捕食者が背後から迫ってくる。その脚は少年とは比べ物にならない程に発達している、その体軀から繰り出される一歩は少年を遥かに超えるものだ。そんな敵に対して只走っていては簡単に追いつかれてしまうのは嫌でも理解できてしまう。故に少年は建物に空いた穴や障害物の隙間といった僅かに空いた空間に飛び込むように逃げ続ける。敵よりも小さな体を生かして逃げるしかなかった。

だが敵は執念深く獲物と定めた少年を噛み殺そうと追い続ける。追い付かれる事もないが、距離が開くこともない。しかし簡単に捕まえられると考えていた獲物が逃げ続けるのが不服なのか次第に背覆った銃器で少年が潜り込んだ隙間を破壊するように銃撃を繰り出す。その音は段々と大きく、何より唸り声も大きくなり殺意を漲らせているのを理解してしまった。

そんな少年と生物兵器のチキンレースも終わりを迎える。少年が直線状の道路に出てしまったのだ。顔から血の気が引いていくのを感じる、なぜなら其処には脇道と呼べるものではなく障害物になりそうな物が皆無だから。ならば違う道を探そうにも時間は残されていないかった。

少年の背後から爆発音が響く、障害物は破壊された、もう直ぐ敵がやってくる。

決断するしかなかった。

後ろから追い付かれてしまうよりも先に道路を走り切り、その先にある建物に飛び込むしかない。それは少年には圧倒的に不利であり、追跡者には有利なものであっても、例えば10メートルにも満たない距離であろうとも。

それでも少年は走るしかない。限界まで分泌されたアドレナリンが限界を既に超えた身体を動かし続ける。

少しでも速く――

少しでも遠く――

だが結果は直ぐに現れた。既に距離は縮まっているのだろう。後ろを振り帰らずとも生物兵器の息遣いがはつきりと聞こえてくる。

生暖かい吐息を首筋で感じることができる。

此処までだった。死は背後に迫り、打開する術は無し。それでも少年は走り続け、その背に生物兵器の爪が振り下ろされ——突如地面が爆ぜる。

轟音と共に湧き上がる土砂、その衝撃に少年は吹き飛ばされ——流転する視界が閉じる直前に映し出したのは上半身が吹き飛ばされた生物兵器だった。吹き飛ばされた勢いのまま廃墟の壁に叩きつけられた少年は痛みに呻く事しか出来ず、それでも死に至る事はなかった。少年の背後には吹き飛ばされた土砂あり、それが衝撃を吸収したからだ。それでも残った衝撃は少年にとって苦痛に値するものだった。

だが痛みに蹲る少年の耳には先程よりも大きな炸裂音、そして今まで聞いた事が無い甲高い機械音を捉えた。それと同時に地面が揺れる、何かとても重いものが落ちたのだと分かった、だがその正体は分からない。脂汗を掻きながら痛み耐えている少年は謎の音の正体を確かめようと目を開き——そして目を奪われた。

それは巨人だった。甲高い駆動音を響かせ、人間が持てる口径をはるかに超えた大砲と見間違うような銃で並み居る化け物を殺している。

砲口から閃光が煌めく度に生物兵器の身体が抉られた様に弾け飛ばされていく。しかし生物兵器もただ殺されるだけでなく、その爪と牙を巨人に突き立てる。しかし鋼鉄の装甲に傷を付けるだけで壊す事は出来ず、そして巨人は銃撃だけでなく近づいた生物兵器を巨体を活かして殴り殺し、踏み潰していく。

それは圧倒的な暴力、虐殺であり蹂躪、無慈悲な死の嵐が吹き荒れ、それは瞬く間に終わった。

そして全てが片付いた時、巨人は身体各所から青白い炎を出しながら去っていった。

跡に残されたのは吹き飛ばされ、潰され、原形を留める事無く破壊されて残骸だけが残された。

その光景を少年は始まりから終わりまでただ見ていた。心奪われたように見つめていたその姿は見惚れているとあっていいだろう。

だがサイレンは未だに鳴り続いていた。暫くすると遠くから怪物たちの雄叫びと銃声が聞こえてきた。

急いで少年は周りを見渡し逃げ込める場所を探す。このまま此処に残り続けたら再度生物兵器が襲って来る可能性があるからだ。そして視線が少年が立つても余裕で通れそうな大きさの配管を見つけた。生物兵器には小さく中に入って追いかける事はないはず、そう考えた少年は脇目を振らずに配管に飛び込む。そして残った力で薄暗い配管の中を進み続ける。

背後では銃撃と雄叫びが再び響き渡っていますが少年が振り返ることはない。

只一つ、少年は先程の巨人の蹂躞劇を繰り返し思い出していた。

俺の名は……

自らが出した吐息が反響を繰り返しながら聞こえてくる配管の中を少年は進んでいく。足元は薄暗く自分の身体の輪郭がうつすらと分かる程度でしかない。それでも配管の中は完全な暗闇ではなかった。

そして進みながら一息つけると自身の状態の余りの酷さに少年は乾いた笑いが出てしまった。走る体力は既に尽き、今や惰性で何とか歩いている状態、もしここで立ち止まってしまえば当分の間は動けそうにない。それをなんとなく理解しているからこそ配管の中を少年は当ても無く進み続ける。それでも少しでも明るいほうへと無意識の内に脚が動き、そして何度目か分からない分岐を経た先で視覚が光を捉えた。暗順応で少年の視界には真つ白としか認識できない配管の先、それに少年は引き寄せられる様に進んでいく。

そして少年は配管を抜け、その先にあったのは広い空間だった。辺りに目を凝らして観察すればそれは数ある廃墟の一つである事が少年には分かった。

恐らく配管はその廃墟の中に元々埋設されていたのが地上に露出したものなのだろう。廃墟の天井は崩落しており、むき出しの空が広がっていた。そして此処から差し込んだ光が配管の中を反射を繰り返しながら照らしていたのだ。

改めて少年が空を仰ぎ見ると灰色の雲は既に消え何の混じり気もない青い空が広がっていました。配管を進んでいる間に晴れたのだろう、青空は見上げていて心地良い光景であり……ですがまだ少年は気を緩ませる事が出来なかった。呼吸を落ち着けると直ぐに耳を澄まして周りの音を拾い始める。

自分の吐息の音が鼓膜を震わせながら銃声と咆哮が聞こえてくる。しかしそれは非常に小さく、音の発生源が遠くにある事を示している。生物兵器の出す足音といった音も聞こえてはこない。

そうして身近に危険が無い事を理解した少年は漸く命の危機を脱したと判断した。それと同時に崩れ落ちそうになる身体に最後の鞭

を打ち壁際まで歩き、たどり着くと凭れ掛かるようにして座り込んだ。

肺にある空気を全て吐き出すような深い息を吐く。荒い呼吸を幾度か繰り返していくと酸素が身体に十分に供給され隊長が次第に落ち着いていく。そして何となく呆然と空を見上げていると脳裏には様々なものが浮かんできた。それは此処までの過酷な道のりであり、巨人の事であり、襲い掛かってきた生物兵器——しかしそれよりも重大なことに少年は気づく。

少年は自分が何者か分からない。

自分の名前は、誕生日は、産まれた場所は、今までどうやって生きてきたのか、家族はいるのか、どうしてこんな危険な場所にいるのか、全てが分からなかった。まるで自分には過去と呼べるようなものがない。存在しないのではないかと思ってしまうほど何も記憶していないのだ。

それなのに頭の中には様々な知識がある、そのことは分かっていたのだ。生物兵器の名前もその知識の一端、だがこの知識はまだ少年も理解できない物もある。謎は深まるばかりだ。

「でもそんなことは後回しでいいや」

そう呟きながら少年は座り込んだ体制を崩して横になる。逃げ続けるために酷使した身体が休息を欲していた。思考は緩慢になり、瞼はゆっくりと落ちていく。

思考が途切れ途切れになる中で一つの風景が浮かんできた。それは瞼の裏に焼き付いた鋼の巨人の姿だった。そして、まだ意識が明確になってから半日もたっていない少年が明確に理解したことが一つだけある。

——それは『力』

敵対する存在をいとも簡単に蹂躪していく巨人、理不尽を更なる理不尽でもって破壊し尽くす暴力。

この世界は容易く少年を死に追いやる事が出来る。それに抗い生きていくのならば『力』が必要不可欠です。

力とは知力であり、財力であり、暴力である。それらを得ることが

できれば自分は生きていくことができる、'、生きたい、'という望みが叶う。

故に決意する、力を手に入れる事を、この世界で生き抜く事を自分の名に誓って――

「……そういえば自分の名前は分かんなかったわ。どうしよ？」

どうしてか少年は自らの名前を思い出す事が出来ない。それは流石に不味いのではと考え自分の記憶を探り出そうとするも手掛かりさえも掴む事が出来なかった。

「名無しはさすがにないよな……、ないよな？」

結局の所分かったのは自分の名前が分からない事だ。しかし、いつまでも名無しでは自分も困る。そこで暫定的に自分に名づけを行う必要があるのだが……

「アルファ、ベータ、ガンマ、フォックス、セイバー、タマ、ポチ……？なんなんだこれは、名前なのか？」

頭の中にはそれらしい人名が幾つも浮かんでくるがこれといったものはなく、それ以前に名前と呼べるかも怪しい物しか浮かんでこない。さすがに自分を『アルファ』と名付けるのは嫌だなど、ならば他にましなものがないかと思案をするが浮かんではこない。

あーでもない、こーでもないと思ひ続けながら少年は空を見上げる。此処に来るまで見てきた荒廃した風景には似合わないような青く澄み渡った空が視界いっぱいになり、その中を小さな雲が流れていた。それをぼんやりと少年は暫くの間眺め続け……

「空……、そら……、ソラでいつか」

なんとも適当に少年は自身の名づけを終えた。

何はともあれ少年、ソラはこの過酷な世界を生き抜くことを決めた眠るために瞼を閉じた。

そして思い出したかのようにソラのお腹がぐうぐうと大きく鳴り響

いた。

「お腹減った……」

ソラは先ずは空腹でキリキリと痛むお腹を鎮める事、それを最初の目標とすることにした。

ゲテモノ食い

ソラは肉を焼いている。

薄くスライスした肉をナイフに突き刺して焙るといふ、なんとも豪快かつ野性的な調理法。じゅわじゅわ、と焙られた肉が焼ける音が耳に届き…、途中からブスブスと音が変わっていき…、ただでさえ赤黒い肉だったのが真っ黒に染まっていくがソラは焼くのを辞めることはない。

最早元が肉であったとは分からなくなるほどに姿が変わっていく様は恐ろしいもの。それに加えて元々あった生臭い匂いが強まっていくという散々なもの。

——これを口にしないとダメ？そもそもコレ食べれるの？

と至って当たり前の疑問と不安が空の胸の中に沸き上がるが、しかしソラの理性は湧き上がる疑問と不安を無理矢理黙らせた。なぜなら目の前の肉が今のソラが口にできる唯一の食料だからだ。

訳も分からず目が覚めた今のソラは自分が何者なのかすら分らない。そして疑問を解消するだけの時間はなく、明らかに危険な不審者たちの集団から逃走した、背後に迫る怪物に怯えながら。

そうして何やかんやあって今いる廃墟に流れ着いたのだ。そして廃墟で一休みしたソラは思い至った。

——これからどうしらいんだ？

何も分からない。此処がどこなのか、どこに行けばいいのか、何をすべきなのか、そしてグウー、とお腹から非情な音が廃墟に響き渡る。

それは初めての感覚、腹部が締め付けられ、何かを欲している。それが意味するものは何か、ソラは混乱しながらも何故か頭にある知識から該当する事象を探す。それに掛かったのは僅かな時間、されど現状を理解してしまったソラは途方に暮れる。

これは空腹なんだと、可食が出来るものを摂取しなければ飢餓、飢えが待っていると。それを回避しなければ待っているのは死だと。

ソラは周りを見渡す、目の前に広がるのは廃墟だ。

少し移動して視界が開けた場所に移動、再び周りを見渡す、目の前に広がるのは廃墟だ。

高いところから見てみようかと瓦礫をよじ登る、息も絶え絶えでたどり着いた場所から再度周りを見渡す。目の前に広がるのは廃墟、今いる建物とは別の廃墟が視界一杯に広がっていた。

「神は死んだー」

意識せずに出てきた叫び、それがソラの心境を偽りもなく表していた。

これにはソラも困り果てました。全く見知らぬ土地での命懸けのサバイバル生活ほど無謀なものはありません。それでもやらなければ待ち受けるのは餓死といった鬼畜仕様ときたものです。

と既に神様が見放していきそうな世紀末世界でソラは天に向かって叫ぶのでした。それと同時にお腹から鳴り響く空腹の知らせ、叫ぶという余計な行為で貴重なカロリーを消費してしまいました。

そして今のソラに必要なものはカロリー、体の動かすためのエネルギーが尽き掛けている現状をどうにかしなければなりませんでした。

カロリー獲得の方法は食物の摂取です。だがしかし現在のソラは食べ物を持っていない筈もなく、食べ物を買うお金もありません。仮にお金を持っていても何処に行けば食料品が買えるのか分かりません。

そして食物を得る真つ当な手段を潰された以上残るは非合法な方法で手に入れるしかありません。つまりは泥棒を……とソラは考えましたが検討するに値しませんでした。そもそもこの身体で泥棒は成功するのか、身体能力も泥棒に関する技能も持っていない現状では十中八九失敗するでしょう。そして失敗でもすれば強面な方々が大手を振っているこの世界、袋叩きにあって死ぬのが目に見えています。

鬼畜仕様、此処に極まれりです。

ならばどうするのか、あれこれ考えましたが名案と呼べるものは出てきません。そんな事を何回も繰り返したソラが無駄だと悟るのに少しばかり時間がかかりました。

そして結局の所先ずは行動あるのみだと決断し廃墟の配管から危険地帯へとソラは赴いたのでした。

その収穫がソラの背後に置かれた肉の塊とガラクタの山でした。肉は今日一日で随分と見慣れたワンコ（犬型生物兵器にソラが付けた呼称）のもの。巨人にミンチにされたものから食べられそうな部位を拾ってきたのでした。そしてガラクタの山はワンコとの戦いで殺された強面の方々の死体からはぎ取ったものです。

その所業は正しくハイエナと言えるでしょう。

それはそれとして、ソラは食料？を手に入れる事が出来たのでした。そしてガラクタの中からナイフと使い捨てライター、固形燃料を取り出して早速調理を行います。

そして見事に焼けた肉が出来ました。

食中毒を警戒して真っ黒焦げになるまで火を通した肉はまるで岩石のようです。決して上手に焼けたなどと口に出せないものです。そんな岩石と化した肉をもう一つのナイフで焦げだ部分だけを削ぎ落とします。そして出て来たのは火が完全に通った食べても多分大丈夫な肉です。

それは銃声に怯え、咆哮に肝を冷やししながら手に入れた貴重な食糧でした。見た目がどうであれ……。

「いただきます」

そう言ってソラは肉を口に運びます。ちよつと生臭いけど大丈夫だと根拠もなく自分を信じ込ませながら食べた肉の味は――

「不味ッ!？」

とても食べられたものではありませんでした。ゴムの様な弾力で噛み千切れず、下手に噛めば血生臭い肉汁が染み出し、生臭い匂いが口から鼻へ出ていく。食欲減退を引き起こすゲテモノをソラは生み出してしまいました。

何となく食用にはならないと思っていたワンコの肉でしたが予想以上のもの仕上がってしまいました。一刻も早く投げ捨てるしかないと考えたソラでしたが現状食べられる物はこれしかありません。

最早諦めるしかない。人生の楽しみの一つである食事を早々にソ

ラは諦めました。そして味も、匂いも、何もかも無視して苦行と化した食事を続けるしかないと悟りました。

それからはソラは積み上げられた肉を焼き、機械的な動作で口に運んでいき肉を胃に落とし込みました。味なんて考えません、考えたら終わりです。そうして食べ続けることで何とか胃の空腹は収まりました。

「…………お腹下さないでくれよ」

食後に不安を感じながらも横になったソラは生臭い自分の息にげんなりしながらも、これから先やるべき事を頭の中に思い浮かべます。それは生活拠点をこの廃墟に築き上げる事。その為にやらなければいけない事は食料の確保、水の確保、寝床の確保、現金の確保…………、やるべきことは多く暇は一分一秒と無駄に出来ません。

「生きるって大変だな」

そんな事を他人事のように言いながら、満腹になったことで襲ってきた睡魔にソラは身を委ねるのでした。

そして伽藍洞の中にソラの自我が少しづつ芽生え始めた。

クラフトするなら先ずは素材を集めないと……

ソラの生きる世界は端的に言えば世紀末感漂う世界です。かつて起こった大戦にて世界は炎に包まれたといってもよいでしょう。そして人類は絶滅する事も無く今日までしぶとく生きているという感じでした。とは言っても人類の生存領域は縮まり人々は無数のコロニーや都市を築き上げてはその周辺で生活しています。その中には貧民街もあり、ソラが今まで生きていた場所もその中の一つでした。

そんなソラですが今現在は貧民街を遠く離れた場所にいます。そこは貧民街から遠く離れ幾つもの廃棄された建物が広がる無人地帯であり、そこは常日頃から無法者たちが争いや取引に利用する場所、まともな感覚の持ち主であれば絶対に近づかないような曰く付きの土地です。

しかしソラはその危険地帯の中に現在進行形で住み着いています。「使える、使えない、使えない、使えない、……多分使える？」

そして廃墟の中にはガラクタの山が積まれています。元々廃墟には無かったガラクタの山はソラが危険地帯をコソコソと歩き回って集めた物でした。そして今はある程度溜まったガラクタの検分を行っていると看做された。そしてある程度選別が終わると使えないものは廃墟の隅に積み上げ、使えるものは分解、整備等を行います。

元々は廃墟に住みやすくしようと少しだけ素材を集める程度でした。しかし予想以上の収穫が出来た事から今ではガラクタ漁りはソラの日課になりました。

その成果の一つにソラが着ている服があります。今は廃墟に逃げ込んだ最初の頃に着ていた襤褸切れになりかけの服ではなく大きく丈夫なジャケットを着ています。それはガラクタ漁りの時に見つけた死体から頂いたものでした。かなりの年月が経ったのか死体は白骨化しており、ジャケットも砂まみれになっていました。服そのものは対して劣化していませんでした。それを見つけた事が出来たソラは襤褸切れ寸前の服を脱ぎ捨て死体から剥ぎ取り着ました。

かなり大柄な人が着ていたのか、まだ小さな子供のソラが着れば自

然とワンピースの様になり移動に支障がでましたが、大きくダブつく服の何カ所かをベルトで縛ることで何とか着こなしました。何より沢山のポケットに丈夫そうな素材で作られたジャケットを着ないという選択肢はありませんでした。

このような感じにソラは日課と化したガラクタ漁りの中から使えそうなものを集めては廃墟に持ち帰り、生活環境を整える資材として扱っています。そのお陰で何も無かった廃墟の中も多少はマシになりました。

しかしソラには一つの懸念がありました。

それはガラクタ漁りは持つてあと数日という予想です。ソラの今いる場所が何処に位置するのかは分かりませんが貧民街は近くにあるはずです。そこに住まう彼らもソラと同じように困窮し、生活の糧にするために近いうちに此処までガラクタ漁りに来るでしょう。数日前に大きな戦闘が時ならまだしも沈静化した今ならと考える者はいる筈です。

だからこそ、ここ数日は日夜ガラクタ漁りに精を出していたソラでしたがそれも限界でした。廃墟付近のガラクタは可能な限り拾い集め終わり、これ以上集めるには廃墟から離れなければならず危険を伴うものとなるでしょう。そんな感じに見切りを付けたソラでしたが結果は上々、多くの使えそうなものをガラクタの中から見つける事が出来ました。

しかし喜んでばかりもいられませんでしたが、何故ならガラクタの中には今のソラでは活用しきれない物が幾つも入り込んでいたのだからです。

それは銃です。

それは血で汚れたり、大きく破損しているものもありますが、それは紛れもなく銃であり、無我夢中で集めたガラクタの中に幾つもありました。流石に新品の様な物は無く何れも傷や汚れが目立ち、使えるものは限られてくるでしょう。それでも此処には多く無法者の死体と共にそれなりの量の銃器が破棄されていました。それに合わせて大量の弾薬も意図せず手に入れる事が出来ました。

それがソラの頭を悩ませました。例えば自動拳銃、小口径で、低威力とはいえ何とか今のソラでも使えそうな代物です。しかし、銃本体が拾い物であり、銃弾も同様です。

「暴発が怖いんだよな……」

しかし安全は保障されていません。引き金を引いたら銃弾が弾けず代わりに自分の手が弾ける、なんて可能性もゼロではありません。なので使いたくありません正直使いたくありません。

「でも捨てられない、面倒だな」

だからと言って捨てるのは非力なソラにしてみればあり得ません。なので当分の間は廃墟の肥やしにして、暇を見つけては銃の分解と整備の教材として使うのが関の山でした。

それでも切り札の一つにはなるでしょう。本職の無法者達にはなく自分と同じような貧民街出身者には脅しとして使えます。

そんな感じでガラクタを選別していればあつという間に時間は過ぎ去っていきました。

空腹を訴える胃袋には激マズワンコの肉を押し込みながら使えるものは引つ張り出していき使えないものは取り敢えず隅に積み上げておく忙しい一日。そのお陰で住処と化した廃墟も多少はマシになってきました。解決していない問題はまだまだ沢山あります。

しかし解決したことも少なからずあります。今日であれば集めた衣類で作った即席の寝床であり、素材が優秀なのか冷たいコンクリートの床に直置きしても冷たくありません。

これで漸くコンクリートの冷たさに震えて眠らなくて済む、それが本日のソラの最大の収穫でした。

虫の知らせという深読み

ソラが廃墟に来てから半月が過ぎた。その日は雨が降っており薄暗くジメジメとした空気がソラの肌を舐めるが本人は気にする事も無く銃器の分解をしていました。何故ならやる事がそれくらいしかなく暇だからです。

廃墟に逃げ込んでから急いで生活に必要な物、その中で一人で作れそうなものをソラは一通り作ってしまいました。テント、寝袋、雨水収集機、簡易コンロ、簡易倉庫……、最低限の品質で作り上げたそれらは快適とは言い難いですがガラクタで容易に修理が可能なものです。そしてこれ以上の品質のものを作るには知識も技術も現在のソラにはありませんでした。

そんな感じで手持無沙汰になったソラは暇潰しと訓練も兼ねて拳銃を組み立てています。ですがそのお陰で最初の頃は分解するだけで元に戻せなかった拳銃も今では分解、組み立ても可能になりました。

出来ればソラもガラクタ漁りに行きたいのですが、元々命懸けのガラクタ漁りが悪天候の日では更に危険度が増してしまいます。薄暗く視界不良で転んでその音を聞きつけて色々誘き寄せてしまったり、廃墟に響く雨音でワンコの接近に気付くのに遅れてしまったり……、命懸けの逃走の末に学んだ苦い経験でした。既に多くの危険を体験し死にかけてことも両手で数え切れないほどのモノになっていますがそれでも避けられるのなら可能な限り危ない事は避けたい、こうして天気の良い日は廃墟にこもってガラクタを弄り回すことになりました。

その一環として銃器の分解組み立てがあり、そして娯楽がない以上他にすることは無いソラは組み上げた銃器に安全策を施した上で試射も行いました。そんな日々を過ごした結果として拳銃だけなら5丁、直ぐに使えるように整備して倉庫に保管してました。

しかし残念な事に銃器を使えるようになってもソラの身体では5mも離れた的に当てる事すら出来ません。扱うには身体が小さく弱

すぎ用途はこけおどし止まりになってしまいました。それでも何かに使えるのではないかと考えて拳銃の他にも幾つか銃器を拾い集めました。突撃銃、散弾銃、狙撃銃……、スクラップ寸前の銃器達を整備して何とか扱えるようにはしては廃墟の隅に積み上げていました。そして手元にあつた最後の拳銃の整備を終えたときソラは完全に暇になってしまいました。銃器や生活用具の整備を全て終えやる事なくなつてしまいました。だからといって何もしないというのは避けたい、けれど出来ることは何もないという悩ましい現状でした。

「……知識が欲しい」

衣食住の基盤を何とか作り上げ精神的余裕を持てたソラ、しかし其処から先の展望が全く見えてきませんでした。だからこそ知識を求め、しかし廃墟にいるソラには知識を手に入れる伝手も方法もありません。可能性として巨大な兵器が跋扈する世界なら電子書籍という形もあり得ます。しかし閲覧するなら端末が必要であり、その端末をどうやって手に入れるのか、貧民街しか知らないソラの知識は当てにならず八方塞がりの現状です。

「……寝よ」

結局の所寝るしかありませんでした。道具の片づけを終えてはテントの中に入り寝袋に包まれます。そして明日が晴れることを願つて目を瞑り――

「何の音？」

しかし耳に届いた異音が眠ることを許しませんでした。その音は雨音で聞こえにくいですが一定のリズムを刻んでいます。そしてソラが今までに聞いた生物兵器たちの出す音とは趣が異なっていました。

「機械音……、車両の音？」

廃墟の地面に耳を付け伝わってくる音を注意深く聞くことで見当がつきました。しかし何故車両が此処に入ってきているのか理由が分かりません。廃墟にいるのは危険な生物兵器等で人が近づくには危険です。

「いや、だからこそなのか？」

此処に人が来るなどまともな理由ではあり得ない、しかし此処にまともでない理由でなら来るという可能性がある。その理由ならばソラには思い当たる節があります。

「後ろ暗い訳、オークション……、違法な取引？」

ならば迂闊に出歩くのは危険といえるでしょう。もし取引護衛達に見つかれば殺される可能性もあり、この場では大人しく廃墟にこもっているのが安全といえるでしょう。

——しかし、ソラの脳裏にある不吉な考えが浮かびました。

「まさか、俺を探しに来た？」

たかが貧民街出身の子供一人を探し出す為にこの危険地帯に来るなどあり得ない。しかしその可能性がゼロと断定することは出来ず、当たっていた場合は救い出すためでなく連れ去る為でしょう。ソラの脳裏に浮かび上がるのはオークション会場で自分を競り落とした人の形をした怪物でした。その表情を思い出した瞬間背筋に全身に鳥肌が立ちました。

「どうしよう!？」

無論ソラもこの予想が深読み過ぎないとは分かっています。しかし、それを否定するだけの情報も確証も何も無い現状は最悪の事態を想定して動くべきでしょう。結論出したソラは急いで行動を起こします。廃墟にある生活用品やガラクタに隠蔽を施し隠します。急いで運よく死体から回収できた非常食や水をガラクタで作った雨合羽の中に仕舞い、他にも役立ちそうな小物をポツケに入れていきます。そして最後にカロリー補給でワンコの肉を胃に落とすし込むと隠れていた廃墟から出ていきます。

僅かな音も聞き逃さないように神経を研ぎ澄ましながらソラは雨が降りしきる廃墟に繰り出しました。

それは最悪の可能性を避けるために、それが現状で最適な行動であると考えたうえで急ぎ車両から遠く離れるために。

最善だと考えたものが……

雨が降りしきる中をソラは走っています。ある程度走ると近くに
ある廃墟に身を潜め呼吸を整えます。

警戒を怠ることなく、可能な限り早く、そのお陰で最初の頃より聞
こえていた車両の駆動音はずっと小さくなりました。その結果とし
て住処となった廃墟からは遠く離れてしまったが必要経費といえる
でしょう、そう考えるとソラの胸に漸く安堵が湧いてきました。しか
し油断はできません、出来ればもう少しだけ離れて野外で一泊する必
要はあるでしょう。

そう考えて呼吸を整えると雨合羽を着直し、身を隠していた廃墟か
ら出て行こうとし——ソラの目の前を何かが通り過ぎました。

「え？」

ソレはソラから少しだけ離れた場所に向かい地面にぶつかりまし
た、そして小さく、しかし深い穴が一つできました。そして目の前の
何かが通り過ぎたのは一回だけではありません。二回、三回、回を重
ねることにその軌跡は地面に小さな穴をあけながらソラに近づいて
いきます。

「!？」

ソラは急いで先程隠れていた廃墟に飛び込みました。そしてナニ
か——いや、銃撃から身を隠しました。その後も立て続けにソラが隠
れた廃墟に向かって銃弾は放たれたのか廃墟の壁面が弾け飛ぶ音が
聞こえてきます。

一体何がどうなっているのかソラには分かりません。只分かるこ
とは正体不明の銃撃に狙われている事と射手はソラが逃げようとし
た方向にいるという事。これから導き出されることはこのまま逃げ
れば撃ち殺されてしまうという事。

想定外にも程がある事態にソラの頭は混乱の極致に達してしま
いました。それでも何とか冷静さを取り戻し現状で取りうる最善の手
段を模索しようし——それだけの時間を与えてくれる程相手は甘い
存在ではありませんでした。廃墟の床につけた手からは雨とは異な

る振動を感じ取りました。それは一定の間隔で尚且つ少しずつ大きくなつていきます。しかし耳に聞こえるのは雨音だけ——雨音だけでした。

その事を理解したソラの顔から血の気が引いていきます。何せ今のソラでは決して真似出来ない隠密技術、それを実行できる集団が近付いているのです。そんな彼らの目的が何なのかは分かりませんが、しかしこの廃墟に入り込んでいる以上まともな理由ではなく、そんな彼らが小さな子供を見逃してくれるのか、賭けるには余りにも分が悪すぎます。

そしてソラにできるのは今までの道を逆走して逃げる事だけ。

考える時間はありません、ソラは急いで走り出します。射線が通らないように廃墟に身を隠しながら走り続けていると次第に車両から聞こえる排気音は大きくなっていきます。だからといってギリギリまで車両に近づくなどもつてのほかでした。しかし背後から迫る謎の集団からも逃げなくてはいけません。

押し付けられた無理難題に対してソラが出来たのは廃墟に逃げ込むことだけでした。そして廃墟の中に階段を見つけると急いで登っていき、そして最上階まで登り切ると近くの壁に寄り掛かり乱れた呼吸を整えます。そして呼吸を整えると俄かに外が騒がしくなってきました。その音に耳を傾ければ言い争いが聞こえてきました。が会話の内容までは雨音のせいで分かりません。それでもこの理不尽な状況から流れるヒントがあるかもしれないと考えたソラは懐から取り出した双眼鏡で外から見つからないように観察します。すると視線の先には趣の違う二つの集団があり言い争ってました。何かの取引があつてそれが成立しないのか、はたまた片方がごねているのだけなのかは見るだけしかできないソラには分かりません。しかし言い争っている事を覗いても視線の先にある光景は何か違和感を感じるものでした。それが何なのか解決しようと取引の現場を覗き続けると漸く違和感の正体が分かりました。

「女しかない?」

双眼鏡に写るのは無法者で間違いは無く銃器で武装し、片やヒヤッ

ハー！と叫ぶのが似合いそうな服装をした集団、そしてもう片方は何処のマフィアですかと言わんばかりのスーツで決めている集団でした。これだけなら終末世界にも相応しい光景といえるでしょうが、その全員が女性とくれば危機的な状況にあるソラでも首を傾げてしまふものでした。

しかしそんな疑問がどうでもよくなる事態が起きました。二つの集団に突如銃撃が加えられたのです。突如として始まった銃撃戦、驚くことに二つの無法者の集団は一時共闘することにしたのか第三勢力に向けて銃撃戦を展開します。しかし歯牙にもかけないとはこの事を言うのでしょうか、突如現れた謎の第三勢力は無法者達に装備、練度、数、あらゆる面で優れていました。銃撃戦は一方的なものとなりました。また一人、また一人と無法者達は撃ち殺されていきます。そして僅かな時間で銃撃音は消え、再び雨音だけが廃墟に響き渡るようになりました。

その様子を隠れて見ていたソラは気が気ではありませんでした。急いでこの現場から離れようと階段に近付き——下の階から聞こえてくる足音に呼吸が止まりました。先程の銃撃戦を制した集団が近づいてくる、その事実を理解するや否や急いで隠れようとしませんが隠れられる場所なんてものはありませんでした。

「手を挙げる」

成す術も無く立ち尽くすソラの背後から声が聞こえてきました。冷たく鋭い一言、それを聞いた瞬間にソラの命運は尽きました。そして指示通りに両手を挙げると背中から押し倒されます。その力は今のソラでは抗えないもので抵抗なんてものは無意味でした。そうして背中から取り押さえた人物はソラの身体に危険物がないか手早く調べます、しかし何故かその手が途中で止まりました。

「お前、男か？」

その人物も確証がないでしょう。ソラに確認するように尋ねます。そして下手な嘘は身の危険が増すと考えたソラは正直に答えます。

「……そうだ」

「……そうか、そうか、ククククッ」

まるで想定外の面白いことがあったかのように笑いを堪える声が聞こえてきます。しかし通信か何かが入ったのか鋭く冷たい声がまた聞こえてきました。

「γより此方伏兵、爆発物は無し、危険はないと思われます。……はい、それでは鹵獲した車両の一台に乗車して帰投しても宜しいですか？……了解しました」

そして通信が終わると再び笑いを耐えるような声で囁きます。

「今日についてはな」

そう言っただけのように拘束したソラを担いで連れ去りました。

あなたは人ですか？

荒野に広がる悪路を厳つい軍用車が進んでいきます。サスペンションが効いた車内の揺れは小さく搭乗者に負担が掛からないようになっています。

そんな車内には女兵士に捕まったソラが拘束された状態で乗らされてきました。一体どれ程の時間が経ったのか、廃墟からどれほど離れたのかを目隠しされたソラでは知る事ができません。そして唯一塞がれていない耳に届くのは女兵士が機嫌よく奏でる鼻歌でした。

それからしばらくの間は延々と同じ曲を奏でる女兵士の歌を聞く羽目になりましたが、それにも終わりが訪れました。

少しずつ女兵士の声が小さくなっていき、それに代わるように何か別の音が聞こえてきました。そして女兵士が口を噤むようになるのと俄かに耳から聞き取れる音に変化していきました。

先程まで聞こえていた荒野を駆ける力強いエンジン音も車輪が砂利を巻き上げる音も小さくなりました。その代わりに聞こえるのは人が集まることで産まれる喧騒でした。車体で遮られてるとはいえ聞こえるソレは車両がある程度纏まった人口を有する場所に来たことを示していました。

それから暫く低速で喧騒の中を走らせていると目的地に着いたのか車が止まりました。そして再度ソラは車から降りた女兵士に担がれました

そのままの状態で女兵士は移動を続け、立ち止まるとソラの拘束を解いて目が見えるようにしました。

「此処がお前が住むところだ」

そう言われたソラの視界に広がるのは汚部屋……、の一步手前の様な汚い部屋でした。埃つぼく、部屋の中央にあるソファーには脱ぎ散らかした衣服が積み重なり、ゴミの様な物が部屋に散らばっています。

……もう、正直に言えば汚部屋ですがソレを馬鹿正直に言うのは憚れます。なにせソラの生殺与奪は後ろに立っている女兵士が握って

いるのですから。ここで機嫌を損ねてもしたらどんな扱いが待っているのか分かりません。

「この家にいる限りお前は安全だ、寒さに震える事も無い、空腹に苦しむ事も無い、暖かな食事と清潔なベッドを用意してやる」

えッ、この汚部屋で？と内心突っ込みましたが表情には出しません。それでも女兵士の言う通り此処にはしつかりとした屋根があり、空調も効いているのか過ごしやすいのも事実です。

「だけど、タダじゃない、言いたいことは分かるな？」

つまりはそういうゆうことなのでしょう。勝手に誘拐しておきながら代価を請求するとはとんでもない人に捕まってしまったソラでした。

「私はこれから基地に車両を届けに行く。逃げようと思えば逃げられるが……、まあ、止めはしないがな」

そう言っつて女兵士は優しくソラの頭を撫でます。しかし感覚的には心地良いソレが酷く苛立だしいとソラは感じてしまいます。

何故なら女兵士はソラを人として扱っているわけではないからです。それは愛玩動物に向ける優しき、対等でもなければ人でもない、自分に愛想を振りまく動物を可愛がる飼い主。つまるところソラは人ではなく女兵士にとってのペットなのです。

ああ……、嘗てないに程にソラの胸の内が騒ぎ出します。湧き出る感情はただ一つ、怒り。

「では僕は何をしたらいいんですか？」

しかしソレを取り繕った笑顔の裏に隠し女兵士にソラは問いかける。

此処で感情を露わにしてはいけない、湧き出る熱すぎる怒りを冷たい理性が押し止める。

「そうだな……、先ずは部屋を片付けてくれ。細かいことは帰ってから教える」

女兵士がソラに求めるものは家政婦でありペットである事が分かりました。

「それから私の事はカスミと呼べ、分かったな」

「分かりました、カスミ様」

そうソラが答えると笑顔になったカスミは部屋を出ていきました。そして玄関から足音が完全に聞こえなくなると笑顔から無表情に変わったソラは呟きます。

「クソが」

その悪態はカスミ……、ではなくソラ自身に向けられたもの。端的に言えばこのような事態に陥ったのもソラ自身の力不足が原因なのだから。

しかし、これもまたいいものではないかと試しに考えてみます。衣食住は安定、外の怪物に怯える事も無い、その代わりにソラ自身はカスミのペットになる、そこまで考えてみて……

「ありえないな……」

衣食住は安定しているカスミは言いましたがソラが一見した限りでは彼女は兵士です。しかも平和な世界、平和な時代の兵士ではありません。怪物が闊歩し、無法者が跋扈する世紀末です、ちよつとした不運で簡単に死んでしまうのに安定しているなどとはお笑い物です。そしてそれ以上に気にいらなないことが一つ。

「飼われるのは嫌だなあ……」

結局の所好みなのです。ソラは微温湯の様な飼われる人生よりも、過酷な危険に満ち、されど自らの手で生を掴む人生を望んでいるのです。

それこそ笑い話にしかありません、誰もがソラを指さし愚か者と蔑むでしょう、滑稽だと笑うでしょう、それでもソラにはそれがいいのです。

しかし実現するには今のソラには足りないものが多すぎます。知識、能力、機転……、何もかもが、あらゆるものが足りません。それは事実として認めなくてはなりません。

ならばやる事は一つ

「暫くの間お世話になりますご主人様」

彼女が出ていった玄関に向けてそう宣言する。後はソラ自身が微温湯に身も心も融かされないようにするだけ。

そうしてソラの新しい生活が始まる。

r e. 廃墟生活

彼女の変化した日常……？

幸せ、そんなモノは私の人生において一生縁の無いものだと考えていた。

自分が何時何処で生まれたかなど私は知らない、気が付けば薄暗い路地裏にいて残飯を漁って生きていた。だが毎日残飯にあり付けるわけでもなかった。何故なら自分と同じような境遇な奴は路地裏には多くいて残飯を巡っての争いごとが絶えなかったからだ。

だけど私は生き残った。運良く手に入れた拳銃、それは非力な子供にも確かな力をくれ、その力で私は生き残った。時に脅し、時に奪い、襲う奴は返り討ちにした。

そして私には才能があった。だからこそ汚い路地裏にいた私を軍はスカウトした、それだけの価値が私にはあった。

路地裏とは比べるまでも無い生活、その代価に優れた兵士として都市に尽くす。

不満は無かった、これまでの不安定の生活とはおさらばできたのだから。路地裏の奴らの何人かには嫌味を言われたが所詮は負け犬の遠吠えでしかない。

軍に入ったことで多少の贅沢もできるようになった。その中でも食事、特に自分のめり込んだのは酒だった。旨い酒なら良いが、安酒でも構わなかった。飲んでいる間は心地良い気分になれる。

そんな生活を続けている、……いや、続けていた。生活自体に不満は無かった、だが思い返してみればそれだけ、空虚な生活だ。

……そう、不満は無い。だが同時に満たされないモノがあった。それが何のか分からずに空いた穴を酒で満たそうとしていた。



射撃訓練場に銃声が響く。大気を震わせ撃ち出された銃弾は狙い

変わらずに標的に突き刺さる。そのような光景は誰もが見飽きているものであった。

だが今日この日に至ってはそうではなく訓練場には不自然なほど多くの人が集っていた。そして集った彼女達は銃を取って訓練するでもなく見学席に腰かけ、または立っていた。その視線の先にいるのは一人の女性。

冷静、冷酷、冷徹……、彼女、カスミは様々な呼び方をされてはいるが総じて優秀な兵士だ。射撃に格闘、他にも戦闘に関する技術が高い水準で習得しており、まだ年若い年齢も相まって期待された人材だ。訓練成績も日に日に上昇しており、このままいけば昇進も間違いない。なかつた。

だが今日は、いや、最近の彼女は目に見えて成績を伸ばしていた。実戦を想定して支給された強化外骨格を着込み各種装備を身に着けた状態での模擬演習、そして今行っている射撃、そのどれもが歴代の記録を塗り替えるような勢いだった。

しかし最終的なスコアは三位と歴戦の兵が打ち立てた記録には及ばなかった。そして賭け事の対象になっていたのか見学席では笑い声が聞こえてきた。それでも近頃の著しい成長を鑑みれば追い抜くのも時間の問題、次また同じようなことがあれば再び賭けの対象にされるだろう。

「どうしたんだ？近頃は人が変わったのかの様に訓練に励んでいるじゃないか」

「隊長……」

戦闘に支障が無い程度の切り揃えられた黒髪を掻き上げていると隊長、カスミの所属する部隊の上官が話しかけてきた。だがその目は意地の悪さを幾分か含んでおり揶揄う気でいることは容易に察せられた。

「で、最近の心変わりには何かあるのか、どうなんだ」

「何もありませんよ、何も」

表情を変える事無く言い切ったカスミに対し隊長は何度が詰め寄るが冷たく一蹴されるばかり、先に根を挙げたのは隊長だった。

「お前……、何も無い訳じゃないだろう」

「それよりも以前話していた件ですが」

「あ？ああ……、お前の昇級の事か。近頃の成績を鑑みれば1週間後くらいに通達が来るはずだ」

「有難うございます」

「おーい、カスミ。今晚飲みに行かないか？」

「すいませんが用事があるのでお先に失礼します」

そう言うで使用した銃を担ぎながらカスミは射撃場から出ていく。その後姿を黙ってみていた同じ部隊に所属する同僚達は誰ともなく口を開いた。

「……男だな」

「ああ、男だ」

射撃場に残ったカスミの同僚達の思いは一致していた。すなわちカスミの変貌の原因は男であると。

以前から口数は少なかったカスミだが同僚の誘いを断ることは稀だった。寧ろ余程の事が無い限り酒を安く飲める今回の様な機会を逃すことは無い。

そんな飲兵衛が酒を断る、酒より大事な用事？そんなもの彼女達には一つしか思いつかない。

「まさか、あのカスミが夢中になるほどの男がいるとはねえ？」

「で、その男の目星はついているのか？」

「それが全く……」

「生身か、人形か、それすらも分からないか……」

「試しに後を付けてみます？」

「辞めておけ、彼女は優秀だ。ばれてタコ殴りにされるぞ」

そんな風に同僚達の話題の種になっている事を察しているカスミ本人は身支度を手早く済ませるなり基地から出ていく。

その足は寄り道をする事も無く自宅に向い歩き、そうして歩いている内に通勤路である都市のメインストリートの一つに差し掛かる。其処には彼女と同じように仕事を終えた人の他にも多くの人々が溢れていた。活気に満ちた店舗には様々な商品が並べられ、香ばしい匂

いを漂わせる飲食店が軒を連ねる。それらを横目に見ながら過ぎ去ろうとしたカスミだったがある商品が彼女の目を引いた。

それはシンプルながらセンスを感じるチョーカーだ。装飾は少なく一見すれば地味に見える、だがソラの細く白い首には似合うだろうと考えたカスミは迷うことなく購入した。そして店を出て自宅に向かう脚は心なしか基地を出た時より早くなり自宅には直ぐに帰る事が出来た。

「ただいま」

そうして玄関をくぐればソラが『お帰りなさい』と言って出迎えに来てくれる。しかし今日は幾ら待っても出迎えの声が聞こえることは無かった。

「……買い出しに行ったのか？」

靴を脱ぎ部屋に入ると其処には誰もいなかった。とはいってもこれが初めての事ではなく、大抵が買い物で帰りが遅くなっているだけだ。今日も同じだろうと検討を付けたカスミは上着を脱ぐと部屋にあるソラはたまに帰りが遅くなるだとしたらそのうち帰ってくるだろうと考えたカスミは着ていた服を脱ぎ捨てるとソファーに寝転がる。

視界に映るのは手入れが行き届いた綺麗な部屋。ソラが来る前の衣服が散乱し、空の酒瓶が転がる汚部屋には今更戻れない、そう確信できるほど今の部屋は居心地の良い。

「ソラの匂いがする……」

ソファーに俯せになればソラの匂いを感じられる。今日も変わらず此処に座ってタブレット片手に勉強に勤しんでいるのが簡単に想像できた。

「……早く帰ってこい」

◆
だがその日、ソラがカスミの元に帰ってくることは無かった。

「埃かぶってるけど大丈夫だな」

そう言って隠してあった物資を引っ張り出して点検するソラが廃墟にいました。

この少年、ソラは驚くべき事に廃墟生活の再開を始めたのでした。

味方、ゲットだぜ！

世紀末の世界において危険とは身近なものです。暴走した殺人機械、見境なく暴れる生物兵器、突然変異の化物……、数えられない程の危険が世界には溢れ、油断すれば一瞬で命を奪われるという地獄なようなものです。

だからこそ文明を維持できた人間の集団は集い、力を合わせ、危険を排除し人間が生存できる環境を作り出しました。それが都市国家、都市を中心として人間の生存領域を築き上げることです。今日まで人類は生存を続ける事が出来ました、めでたしめでたし——とは終わりませんでした。

人が二人集まると上下関係が生まれる、三人集まると意見の相違が生まれる、世界が破滅したとしても人間の性が変わることはありませんでした。故に都市国家同士で武力衝突が起こるのは当然の帰結ともいえるでしょう。食料、技術、土地、資源、相も変わらず人間同士で殺しあう戦争は日常に組み込まれてしまいました。

さて、そんな世紀末世界でありながら成り行きはともあれ都市国家の一つで短くもない時間生活していたソラ。しかし彼は何をトチ狂ったのか都市での生活を捨て再び廃墟に舞い戻りました。

都市に生きる誰もがソラの行いを知れば正気を疑う事間違いないですが、当の本人に至っては正気でした。そしてソラは嘗ての拠点に舞い戻ると直ぐに行動を起こしました。必要な道具を用意すると急いで廃墟から離れ、近くに広がる荒野に向かいました。そして自身が隠れられそうな大きな物陰を見つけると其処に潜伏しました。

ここからソラの戦いが始まりました。それは銃弾飛び交う鉄火場ではありません、只ひたすらに荒野に生息する生物兵器、怪物などから身を隠し続けるものです。それは危険極まりないことであり、下手をすれば簡単に命を落とすでしょう。

もし隠れている物陰に近付いてきたら、隠蔽が不十分で遠目に見つかってしまったら……、そんな最悪の可能性がソラの頭の駆け巡ります。それでもコレは都市から離れ生きるのであれば、ソラが求める自

由を得る為のは避けては通れない道です。

そして待ち続ける事半日、ついにソラが待ち望んでいた危機が訪れました。

「ギター！」

そう小声で口ずさんだソラの視線の先には小型の機械が荒野を移動していました。

大きな丸い胴体を持ち四足で移動、その胴体の上部には何らかの射撃ユニットが接続されている兵器。都市では『ブリキのおもちゃ』と呼ばれる雑魚扱いの無人兵器です。この兵器の特徴は弱さと数、都市の兵士であれば簡単に駆逐できる程の弱さでありながら、幾ら破壊しても減らない数の多さ。そのせいで都市の財政を地味に圧迫する嫌われ者です。

しかし今のソラにとっては待ち望んでいた存在、すぐさま持ち運んできた機械、端末を起動します。

「立ち上げ……、システム起動……、各種接続機器問題なし……、電波良好、機種特定、当たり！」

ソラの手元にある端末には様々な情報が絶えず表示され変化していき、その端末から伸びた配線は小型のカメラとアンテナ等に伸びています。それらが小さな駆動音を立てながら稼働していきます。そして端末に表示される全ての機能が正常に稼働していることを確認できたソラはシステムを起動させます。

「ハッキングモジュール起動！」

これがソラが新たに手に入れた手札の一つ、ハッキング。荒野を彷徨う無人兵器を捕獲、機能を侵食して管理者権限を書き換えて手駒とする技術。とはいっても専門的なハッキングの知識をソラは持つておらず、攫われて都市にいる短い間で習得できる程簡単なものでもありません。それでも長い間対峙し続けた一部の無人兵器に関しては先人達が多く of 対抗策を残しています。ソラが起動させているシステムもその一つ、パッケージ化されたハッキングシステムは高度AIを搭載した無人兵器には無力ですが、最低限のAIしか積んでいないような雑魚には有効なものです。

そして変化は直ぐに訪れました。目の前にいた無人兵器は移動を停止、正面を向いていた銃器モジュールも糸が切れたかのように銃口が下がっていきました。

「えっ、もう出来たの？」

拍子抜けするぐらい簡単に無力化出来た事を訝しんだソラは端末の画面を見ますが100%と表示された侵食率があるだけでした。念のために暫く観察を続けたソラでしたが幾ら待っても兵器は動き出しません、無事にハッキングできたようでした。

「よっしゃー！」

最初で最大の関門を突破したソラは急いで兵器に近寄ります。すると遠目には見えなかった兵器を事細かく見る事が出来ました。しかし最初の関門を突破しただけでソラのやる事はまだ残っていました。

「えーと先ずは此奴の物理接続端子を探して……此処か、自動迎撃システムの完全停止、ここから権限の上書きして、後は各種認証を上書きして……」

無人兵器の上に乗ってソラは完全な掌握に取り掛かります。画面に表示される兵器の様々な情報を読み取り、必要であれば情報を書き換え、権限を上書きしていきます。そして全てが終わるとシステムを完全終了させ――

「システム再起動！」

兵器から降りたソラが端末に表示されるYESを選択します。すると兵器からは駆動音と共に音声が発生されていきます。

「システム再起動、各種システムチェック……問題なし、武装確認……、操作ケーブル断裂、武装使用不可、周辺環境スキャン」

機体に搭載された三つのカメラがそれぞれキュルキュルと音を立てながら周辺を確認し、それと同時に目の前にいるソラに一つのカメラが向けられました。

「生体反応確認、照合、個体名ソラ、間違いありませんか？」

「うん、あつてるよ」

「分かりました。所有者ソラ、命令を求めます」

「よっしやー！」

ソラのハッキングは成功、兵器は書き換えられたデータを元に判断しソラを所有者だと認めました。その事実にはガッツポーズをしてソラは喜び、しかし此処が危険な荒野であることに思い出すと急いで兵器の上に乗れ込み隠れ家に向けて逃げ出しました。

改造してみよう！

ソラが根城にしている廃墟はそこそこの大きさでした。元々は高ビルであったのか縦長であり幾つもの空き部屋があります。

しかし中には床や天井が崩落して使えない部屋が幾つもあります。それでも空き部屋は多くあり、尚且つ見晴らしの良いそこそこの高さの階をソラは丸ごと根城にしています。

以前であれば其処にはあるのはソラが作った生活必需品と集めたガラクタだけでした。しかし今は其処にソラの身体より大きな無人機がいました。

その数は三機、一機は原型を僅かに留める位に解体され今は邪魔にならないように部屋の隅に置かれています。もう一機は脚を折りたたんで廃墟の外を監視しており、最後の機は駆動部を外された胴体部分だけの状態で部屋の中央に置かれています。その達磨状態の機体にはコードが伸びており、それはソラの持つ端末に繋がっています。

「こんなものか？」

端末の画面には様々な物が表示されており、それを見てソラは別の端末に何かを打ち込んでいきます。そうして一つのプログラムを組み上げるとソラは目の前にある無人兵器に書き込んでいきます。新たなプログラムを加えられた兵器はそれに従って搭載されている観測機器を動かしていきます。そこから得られた情報は即座にソラの持つ端末の送られ表示されます。映し出された情報を見る限りプログラムは正常に作動しているようでした。

「ああ、漸く出来た……、そして疲れた……」

長く続いたプログラミング作業から解放されたソラは廃墟の床に大の字に寝そべります。その直ぐ傍では兵器が観測装置をシヤカシヤカとせわしなく動かしています。

どうしてソラがプログラミングをしているのか、それは無人兵器を鹵獲した日に遡ります。

最初の一機をハッキングしてから荒野にソラは張り付きました。

そして丸一日費やした結果として三機の無人機を鹵獲しました。

この成果はソラを高揚させました。何よりうれしいのが単純な戦力強化、ソラでは扱えない銃器も無人兵器ならば制約無く扱えます。日中は連れまわして護衛役、夜は廃墟の警備、疲れ知らずの機械にしか出来ない事です。

しかし世の中そう上手く事は運びません、隠された問題が直ぐに発覚しました。

手に入れた無人機を廃墟に連れ込んだソラは簡単な検査を兼ねて無人機の外装を外しました。その瞬間鼻に突き刺さるような焦げ臭い匂いが……、黒ずみ光沢を無くした駆動部が……、とにかく問題が山の様に出てきたのです。

見間違かと思つたソラは外装を閉じます。

そして深呼吸してからもう一度外装を外します。

結果は変わりませんでした。それが三機ともでした。

装甲版の劣化に弾薬切れ、武装モジュールの故障に駆動部分の摩耗……、回路の焦げ付きに一部部品の融解……、ソラの目の前にある無人兵器は頼れる戦力ではなくスクラップの一步……、何とか言いつくろつても二歩手前の状態でした。

これでは戦力としても労働力としての使えません。それどころか何時壊れるか気が気ではありません。ならば比較的状态の良い機体を選別してハッキングするしかないのか、とソラは考えますが荒野で待ち構えるしかない時点で見つけられるのは今回の様なスクラップ手前の機体だけです。ピカピカの新品など手に入れられるはずがないのでした。

最初の当てが外れたソラは廃墟の床に両手を突きor z状態……、をする時間も惜しいとばかりにソラは鹵獲した無人兵器の修復に着手しました。

修復の知識が無い？技術が無い？そんな泣き言を言っている暇なぞソラにはありません。共食い上等、三機の中で状態の悪い二機は解体、残った一機を取り出した部品で何とか修復します。『ブリキのおもちや』と呼ばれている所謂雑魚の無人機ですがその設計は簡素かつ

堅実なもの、全くの素人であるソラが端末に保存してある技術書を片手に整備できる程優れた設計をしていました。

そうして修復出来た無人機は元気に廃墟の中を動き回り、その無人機を見てソラは言いました。

「ダメだー！これでは只の動物的でしかない！」

修復した無人機は別名『ブリキのおもちゃ』、雑魚中の雑魚、紙装甲に貧弱火力、修復して弄ったからこそ分かってしまう重大な問題でした。ならばどうするか、ソラは考え、結論を出します。

「そうだ、改造しよう」

火がついてしまった男の子の心、極めて危険な生活を送っている現状、その二つが合わさり始まった改造。もう『ブリキのおもちゃ』なんて呼ばせないと燃え上がる情熱は止められませんでした。積載重量の許す範囲内の装甲、火力の増加、廃墟に貯めていた部品で別ものに変貌してく無人機にソラは『バーニー』と命名。

そして完成した改造無人機を目の前にソラは言います。

「二機だけじゃ不安だな」

そうして始まる改造の日々、バーニーを連れて荒野に行けば同じ機体を鹵獲しては `scrap&build`、端末片手、工具片手に学習と実践の日々。教材と化している無人機もこなれた技術である為、基礎を学ぶのに適していました。そのお陰で一足飛びのモノではないがソラの持つ技能は着実に向上していました。

「バーニー、倉庫にあるジャーキーとってきて」

バーニーに追加で付けた簡易補助腕が握ったジャーキーをソラに渡します。不味いワンコの肉で作ったジャーキー、その程よい不味さに顔をしかめながら再びソラは改造に取り掛かるのでした。

ソラ欠乏症

都市を守る戦力である軍、その駐屯地の射撃訓練場には多くの人が集まっていた。以前此処で歴代の記録に迫る勢いを見せた隊員がまた訓練場に現れるや否や前回と同じように多くのギャラリーが集まってきた。そして今回こそは歴代の記録を抜いて新たな記録を打ち立てるのでないかとギャラリー達は期待していた。

だがその期待は悪い意味で裏切られた。

撃ちだす銃弾は悉く標的を外れ、人質を取った標的は犯人を人質ごと撃ち、リロードに至っては取り換える弾倉を落す。新兵のソレかと思間違うような失敗が続いていく。以前の様な冴えは見る影も無く失敗続きの行動を見せ付けられた誰もが困惑し、落胆し、そして前回はまぐれであると考えた。そしていつの間にか行われていた掛けに負けた素行不良な隊員は一言文句でも言おうとし……、射撃訓練場に立っていた隊員の顔を見て口を噤んだ。

「そこまでだ」

訓練中断の指示を出したのは隊員の上司にあたる隊長だ。彼女は手元にある端末、そこに表示された成績を渋い顔で見ている。

「散々な結果だな……、だがそれよりも酷い顔だ」

射撃訓練場に立つ隊員、カスミの表情は誰が見ても悪い。目の下には厚い隈、頬はこけ、肌は白を通して青白く誰もが一目見ただけで体調不良を心配するほど。部下として普段の彼女を知っている隊長からすれば見ていられない程であった。

「家に帰って暫く休め、休職届は出しておく」

そう指示されたカスミは何も言わずに訓練場を後にしていく。その足取りは頼りなく、ふらついており隊長は自らが下した判断には間違いないように見える。その姿を見てしまったギャラリー達も後味の悪さを感じながら訓練場を後にしていった。

「だがどうすべきか。今のメンタルでは実戦には出せん、早めに心理カウンセラーにでも任せるしか——」

「イヤイヤ、多分無駄ですよ」

「ですね」

しかしその心配は的外れだと言わんばかりに同じ部隊にいる二人の部下が隊長に近づいてきた。

「どうせお前たちの事だから男に袖にされたとでも言うのだから」

「当たり前です！」

「第一、男以外でどうやったら彼女にあそこ迄の心理的ダメージを与えられるんですか？」

「……希少品の酒を台無しにした？」

「それは無いですね、彼女は酒の味が分かる繊細な舌は持ってません。飲めるか飲めないかだけです。」

「なら本当に男に振られたのか？」

「振られただけであなるか」

「もしそうだったら冗談抜きで振られたその日には首吊ってそうだけど？」

隊長の周りには部下の隊員達が続々と集まり様々なことを言い始めた。

「ただ振られただけじゃない、金目当ての男でアイツから金を搾り取ってから捨てた？」

「いや、それであんなに入れ込むもの？ナオミはどうよ」

「そう言った経験は無いけど、そんな見るからに地雷の男に惚れる？」

「無い」

「ないな！」

「逆にどうしたらあそこ迄入れ込んだじゃうのかしら」

「……ものすごく好みだった、とか」

「もしかしてシヨタ好き？」

「いやいや、普通に考えてイケメン好青年でしょ」

「大穴で爺専に一票」

「私はダンディー派で」

そしていつの間にか始まる性癖暴露大会、誰もが予想出来た流れは止まることなく場は混沌としていく。

「そうでしょ、あいつ男に興味ありませんって顔してるけど惚れたら束

縛強そうじゃね」

「いや、カスミに限らず女全員が束縛強いと思うけど……」

「代わりの男でも見つければ元に戻るのかな、それ以前にカスミの男ってどんな奴よ」

「実はそれに心当たりがありました……」

「おいこら勿体ぶらずに聞かせろ」

「隊長も好きですね〜」

「いいからさっさと教えろ」

男日照りの女所帯、体調不良の隊員を話の種にして下世話な話が大いに盛り上がるのでした。

そして話の種にされたカスミは頼りない脚で自宅に帰り玄関を開けた。

「ただいま」

ソラがいなくなってから何度も繰り返した挨拶。だが返事は聞こえてこない、電気の消えた薄暗い家の中には誰もいなかった。

「まだ帰ってこないのか……」

実はもう帰ってきていて散らかった部屋を文句を言いながら綺麗に掃除しているソラがいる。そんなことを職場から家に帰る度に考えてしまっているカスミだがそろそろ限界だった。

「言いつけを破っているぞ、怒らないから帰ってきてくれ」

ソファーに顔を埋めてもソラの匂いはもう消えてしまっている。何も嗅ぎ取れずただ埃っぽい空気が鼻を通るばかりだと分かっているのに何回も繰り返した無駄な行為を続けてしまう。

もはや何もする気も起きず着ていた服をそこら辺に脱ぎ捨て、ソファーに寝転がってしまったのがカスミの最近の習慣と化してしまった。そうしていると家主の帰宅を感じ取った家電達が自動的に起動、照明が付き、空気清浄機が動き出し、壁に掛けたヴィジョンが起動する。だが彼女にはそんな事を気に掛ける余裕はなかった。

「……此処は」

だが視界に映し出されたそれだけは違った。ヴィジョンにはランダムで様々な情報が映し出され、然るべき機関が出した情報もあれば

胡散臭い情報も表示される。だが気になったのは其処ではなく画面に映し出された風景。それはソラを見つけたところだった。

「未確認の無人機が徘徊？」

如何やら最近になってあの廃墟に未確認の無人機が出現するようになった。おまけに時期はソラが消えてからだ。

「まさか……」

カスミの頭の中ではある一つの仮説が生まれた。無論根拠となるようなものは無い、強いて言えば女の勘であろう。

「それでも試す価値はある」

もしかしたら……、そんな可能性が無くも無いのだ。

それに待つのは疲れたのだ。

心の準備が……

荒野には無人機、生物兵器など人間に危害を加える存在が絶えず徘徊している。それらが何処から来たのかは分かっていない、今も稼働している工場で生産され続けているといった説や人間の管理から外れた個体が野生化して自然繁殖したのだという説もある。実際の所は未解明な事が多過ぎて分かっていないことだらけだ。

時に、これ等の兵器は時に一カ所に定住することがある。ソラの住んでいる廃墟もその一つであり何種類かの生物兵器が定住、生態系と呼べるのか分からない摩訶不思議な食物連鎖が構築されていたりする。

そして、その日は廃墟の外から新しい定住希望者(?)の群れがやってきた。

群れで移動しているのは武装狼と呼ばれる生物兵器、別名『ウエポンウルフ』。全高1メートルを超える巨大な狼に背中に乗せた銃器モジュールが特徴的な生物だ。この生物の銃器モジュールは様々なタイプがあり、狙撃に特化したスナイパーモジュール、弾幕を張る多銃身モジュール、誘導性能を持ったミサイルモジュールなどがある。

その中でも特に危険度が高いのが群れを率いるボスの武装である。全高が2メートルを超える巨体に合わせるようにこれまた大きな武装モジュールを積んでいるのだ。

そして、この群れを率いるボスの武装は特異な物であった。それは一言でいえば剣、刃渡りは自身の全高に匹敵する長さの剣を二振り背中に積んでいるのである。それを操るのは背中から生えている簡易腕部、ただし特別製であるのか太く機敏な動きを行える特別な代物であり、それを十二分に操れるボスの強さは群れでも頭一つ飛び抜けたものだった。群れの援護を受けながら敵に接近しては装甲の有無を関係なく切り裂いていく。その強さを前に廃墟に住み着いていた兵器達は一方的に蹂躪され破壊されていった。

だがボスは止まることなく廃墟の奥に進んでいく、自らの群れが住み着くに相応しい住処を探して。

時折建物の上に飛び乗って辺りを見渡すボスは一つの大きなビルに目をつけた。遠目にもその大きさは理解でき、それに見合った広さを有しているのだらうと予想する。既に何かが住み着いているのだろうが今迄の戦いで培った経験をもってすれば問題なく排除できると考えたボスは一目で気に入ったビルに向けて移動を開始する。

そしてビルの目前まで近づけば群れを収容するのに十分な広さがあり、加えて何も住み着いていないらしくビルの中は静かであった。こうしてボスは群れの住処に相応しい建物を手に入れた。そして



ビルの1階部分、建造物を支える柱以外には外と内を区切る壁しか無い吹き抜け構造の大広間。長年にわたって放置されていたせいか障害物と呼べるようなものは無く只広い空間が其処には広がっていました。

しかし今は床一面に侵入してきた武装狼の死骸が一面に広がっていました。そんな惨劇の中でも群れのボスはまだ生きていました。それでも背中に背負っていた剣は一振りは喪失、残る一振りは半ばから折れ、ソレを扱う腕も千切れる寸前、満身創痕の状態でした。しかしボスは諦めません、例え群れが壊滅しよう湧き上がる闘志は衰えることもな——

「ギャウンツ!?!」

しぶとく生きていた群れのボスも流石に遠距離からの大口径弾の狙撃は耐えられませんでした。頭を吹き飛ばされた身体が最後の力を失い大きな音を立てて倒れました。断末魔の叫びがビルの中に広がって反響していき、その声を最後にしてビルの中を静寂が支配しました。

暫くすると侵入者が息絶えた事が確認できたのかフロアから一人の少年がひよこつと現れました。そして目の間に広がる惨劇を目にしています。

「大量だぜ」

そうしてソラの後ろからは幾つもの無人機が規則正しく並びながら現れ、その中の一機がソラへ近づきます。

「作戦行動終了、損失ゼロ、軽度障害二機、弾薬切れ三機、配置済みの罨四カ所が使用不能、以上が今回の戦闘結果です」

「分かった、二番から六番は警戒行動、七番から一二番は掃除と罨の再配備を」

「了解、システム通常モードに移行、指定行動を開始します」

そうしてソラの命令を聞いた一番機が全機体に命令を伝達、各機体が指定された行動を始めていきます。

「肉は食用に一部残して、大部分は有機物分解槽にぶち込んで電力と肥料にして、あー、その前に生えている銃器モジュールの摘出だな。ああ……、それにしても手数が増えるって素晴らしい！手駒が弱くても使い方次第でこうも化けるんだから！」

無人機たちが取り付けられたアームを動かして死骸をビルの奥に運んでいき、フロアには水を撒いて血を洗い流していく光景を見ながらソラは感慨深く呟きました。

今回の武装狼の群れが辺り一帯で暴れまわっていたをソラはビルの高層階から観察していました。ソラとしては群れが暴れるだけ暴れて荒野に帰っていくなら手出しはしないつもりでした。しかし彼らがソラの根城にしている廃墟に入るや否や定住するための巢作りを始めるのを見ては黙っている事は出来ません。定住されでもしたら今後の活動にも支障が出ますし、単純にソラにとって群れは危険でした。故にビルに仕込んだ罨と手駒の無人機を駆使、一息ついて休息の瞬間を狙って強襲をかけました。

群れのボスには手間取りましたが損害無く群れは壊滅、おまけに大量の有機物と銃器モジュールが手に入ってソラはホクホクでした。「ブレードは強化外骨格でもないと思えないし暫くは倉庫で塩漬けにして、それ以外の銃器モジュールはすぐ使えるように整備して……いつその事セントリーガンでも作って拠点防御用にしようか。それにもう少して促成栽培の野菜が食べられる、余力もあるから畑を拡張

する？余ればフリーズドライして貯めとけばいいし……」

無人機という労働力を手に入れたソラは拠点の改造に一段と精神的に取り組むようになりました。何より目に見えて生活環境が良くなっていくのは純粋に楽しいというのもあります。

「さてとお前たちももうひと働きしてくれよ！」

『『おお〜〜』』

意欲に満ちたソラは無人機たちに呼びかけ、それを受けた無人機からは間が抜けた抑揚のない合成音声がかえってきました。そうして逸る気持ちで根城に戻ろうとし――

「みくつけた」

その声が耳に届いた瞬間にソラは固まりました。

「こんな所にいたんだな」

後ろからは足音が聞こえてきます。カツカツと音を響かせながら後ろにいる誰かがソラに近づいてきます。

「迎えに来たぞ、ソラ」

固まってしまった身体、流れる冷や汗、早鐘のごとく拍動を叩き出す心臓。それでも何とか首を動かして近づいて来る人物を確認しようとしみます。とはいってもソラの心当たりは一人だけしかいませんが。

「さあ、一緒に帰ろうか」

其処にいたのは見知った人物、ソラを攫った女兵士カスミがいました。

ちよ、ちよい待ちッ！

脱兎の如く逃げる。言葉にすれば簡単だが逃げる当人にしてみれば命懸け……、今回に限って言えば命は奪われないでしょうが、大事なものが奪い去られてしまうでしょう。その事を謎の勘と理性で理解してしまったソラはビルの中を逃げます。

ソラは住処としているビルの全てとは言いませんが全体の八割程度は掌握しているので迷わず逃げる事が出来ます。加えて各所には事前に監視カメラと罠が仕掛けられており侵入者を足止めするくらいには機能します。それらをうまく利用してソラは今迄ビルに入ってくる侵入者を迎撃し続けてきました。

「ヤバイ」

ビルの中を四脚の無人機が甲高いモーター音を立てながら駆けまです。その一号と呼ばれる無人機の背に乗り込んでいるソラは端末を見ながら冷や汗を流します。

「ヤバイヤバイ」

画面には管理下に置いた無人機のステータス、ビルの見取り図、設置した罠、そして侵入者である女兵士カスミが事細かく表示されています。そしてカスミがビルを進めば進むほど画面に表示される情報は少なくなっていくます、……主にカスミが罠と無人機を破壊するこ

とで。

「ヤバイヤバイヤバイッ！」

「損失四機、戦力の30%を喪失、戦略的撤退を具申」

「逃げたいよ！逃げたいけど、逃がしてくれないの！あの人が！」

ビルの中にソラの悲鳴が木霊します。しかし叫んだからと言って現状が好転するはずも無く画面にはカスミソラの元は刻一刻と近づいてきます。真綿で首を締めるように追い詰められていくソラは何とか現状を挽回できないか頭を振り絞ります。

「どうして接近に気付かなかったんだ！」

「回答、敵が装備している特殊装備のため警戒網に探知されなかったと推測」

「特殊装備って最新のモノじゃなくて三世代くらい前のだよ！アレツ！」

「当機の観測機器では感知は不可能」

「そうでしたッ！武装面は強化していても観測機器はポンコツのままだったわッ！ということとは戦犯は俺か、チクシヨウツ！」

「そうこうしている間にピコンと端末から音が鳴り無人機がさらに一体破壊されました。」

「マジかッ！クソ、なんで私生活があんなだらしのないのに戦闘力は高いんだよ！戦闘力に全振りかッ、家事にもポイント振りやがれッ！」

最早取れる手段は二つ、降伏するか、逃げ続けるか。

降伏すればこれ以上ドキドキハラハラする逃走劇を繰り広げないで済みます。その代わり再びカスミの自宅に連行されBad end。おまけに今回の事で元々強かった束縛がどうなるか、命を奪われることは無いでしょうが、ソラの大事なものは奪われて精神的に死んでしまおうでしょう。

「それだけは絶対に御免だ」

結局の所ソラに出来るのは逃げ続ける事だけ。それでも無策に逃げ続ければ手持ちの戦力は磨り潰されしまうだけ。それが嫌なら最終手段として今の隠れ家を放棄するしかない、それがソラの考えでした。

「けど、あの人が諦めてくれるのか？」

「そこまで考えてソラは断定します、それはあり得ないと。」

執着

それが今の彼女を動かしている物であり、そこに理性が介入する余地はありません。そうでなければソラは捕まえるために廃墟を訪れるなんて危険を冒しはしないでしよう。そして例えソラがビルを放棄しようと彼女は追ってくるでしょう。

「重いッ！重すぎるわ、あの人ッ！」

理性なんて知ったことかとソラを追い詰めるカスミに幾ら理屈を捏ねようが無駄、ならばソラも理屈を捨てるしかありません。

「迎撃する！現状の戦闘行為を中断、指定行動をすべて解除、残存機体

を指定の地点に集結させろッ！」

「警告、侵入者の戦闘力はこちらの戦力を上回っています」

一号がソラに警告を発します。それは現状を正確に分析したものであり、普段であればソラも異論を挟みません。

「ならば、このまま逃走を続けていけば逃げられるか？」

「否定、357秒後には侵入者に追いつかれると予測する」

「ならば、どうすれば現状を打開できる？」

「現状を打開する、に関する定義を明確に提示し、し、し、す s a f a e f c e a r / / . ,」

「嘘辞めて此処で壊れないで！お前に高度なAI付いていないの思いつ出したから変なループに突っ込まないでッ！」

といったドキリとすようなことが起こりながらもソラは急いで画面を操作、戦闘を行っている無人機の行動に介入します。戦闘行為は牽制程度に留めて彼女の周辺にある罠を一齐に起動、警戒して一時的に足を止めた姿を後にして無人機を指定した場所に集め、そしてソラ自身も乗っている無人機を集合場所に急行させます。

「舐めるなよ、捕まった時とは違うんだ」

あの時のソラは弱かった。

以前は無人機を従える事も無く身一つでコソコソ隠れながら暮らしていたいました。

しかし今は違います、幾つもの無人機を従えて廃墟に住む怪物どもと渡り合うことが出来る位に戦力は増加した。逃げるだけじゃない、戦って勝つという選択肢も選べるようになった。攫われる以前の頃と比べれば天と地ほども差があります。

ならばすることは一つ、カスミと戦い勝つ。そして示すのだ、理屈を無視し感情で迫りくる彼女にソラが決して守られるだけの弱者ではない子を、お前の思う通りにはならないぞと、兎に角諦めて帰ってくださいと。

「今こそ雪辱を晴らす時だ！ボコボコにしてやる！」

そうして自身を鼓舞するソラでした。

さあ、一緒に帰ろう

この世界における男の価値は高い。十人の子供がいれば男の数は一人いるかいないか、その希少価値によって男は都市によって丁重に保護され、何不自由のない生活を約束させられる。その恩恵は大きく、一種の特権とでもいえるだろう。だが対価としてその身体は髪の毛の一本に至るまで管理させられる。生活の全てが管理され遺伝子情報の提出は義務となり、時には望まぬ性交を強いられることもある。

しかし都市の財源は無限にあるわけではない。軍事費に、インフラの維持管理、行政を担う職員の給与等と財源の用途は多くあり必然的に男性保護に使われる資金も限られる。ならば保護される男性にランクを付け、支出を可能な限り絞り、保護対象を拡大する、という方針が採られる。

そのランク付けで評価されるのは容姿に頭脳、遺伝的優秀さといったもの。高いランクであれば誰もが魅了される容姿であり頭脳明晰といった女の理想とする男しかなる事は出来ない。そんな彼らは都市によって丁重に保護され生かされる、それに見合う義務を果たしながら。

だがここで問題がある。男が希少であるなら女はどうなるのか？結論から言えば女の方が問題が多い。

女は性欲は強い、男が貴重な世界において貴重な性交の機会を無駄にしないために遺伝子が増えたのかは分からない。だが現実として女は古来から性欲に悩まされ、その解決法は誤魔化すか発散するしかない。それは今でも変わらず時に発散において男性が重度の心的外傷を受けることもあった。そして都市において性欲を発散することとは困難だ。ハッキリ言えば男を買うのにとんでもない大金が掛かるのだ。

男の価値はランクで示される。高いランクの男であれば実質的に限られた富裕層しか相手にせず、それだけの価値があると自らも理解しているから男も相手を厳選する。だが大多数の女達もランクを下

げれば男に手が届かない事も無い。だが今度は手を出したいと思える男に巡り合えるのかという問題もある。無論抜け道が無い訳ではない。男の子を持つ母親に気に入られるか、幼少期から深い関係を結んでいれば可能性はあるが限りなく低いものだ。因みにカスミの部隊の仲間には生身の男の代わりにアンドロイドで代用するといった猛者もいる。しかし機体に投資する金額が相応のものでないと確かな機種が無いといった生身と似たような問題もある。

だからこそ大抵の女は自らを誤魔化し、子を儲けたいと思ったときは人工授精を行う。それが都市に生きる女にとって当たり前のことだった。

だがカスミの場合は違う、廃墟で見つけたソラに出会った、出会ってしまった。

無論カスミも男に興味が無い訳ではない。性欲もあれば抑えきれないときは自分で慰めたりもする。今まではそれで満足していた、それ以上を望んだことは無かった。

結論から言えば飼いならす筈が逆に骨抜きにされた、それだけだ。自宅では甲斐甲斐しく家事をして食事を作ってくれる。

仕事に行く時には「いつてらっしゃい」と言い帰ってくれば「お帰りなさい」と言ってくれる。

寝る時に抱き枕にすれば温もりを感じながら眠る事が出来る。

まだ年齢が若い故に性的に手を出してはいないがそれも時間の問題だ。我慢できるだけの理性が残されているかは非常に怪しい。

だからこそカスミは取り戻したいのだ。危険を冒してまで廃墟に来たのもそのため、それが最初から上手く行くなんて考えていなかったが幸運に恵まれたカスミは再度ソラに会う事が出来た。

しかし幸運は其処まで、カスミの姿を見た瞬間にソラは逃げ出したのだから。無人機に乗り込んだソラの移動速度は思いの外速く、呆けていたカスミの視界からあつという間に消えてしまった。

だがその程度で諦めるカスミではなかった。

「待ってくれ、どうして逃げるんだ！」

「貴方が追いかけてくるからですよッ！」

逃げたソラの後を追うようにカスミはビルの中を突き進む。軍で使用している物に限りなく近い民生品の強化外骨格が人工筋肉を軋ませ人体の限界を超えたスピードを叩き出す。

「こんな危険な生活はしなくてもいいんだ！家に帰ろう、命の危険に怯える必要はないんだ！」

カスミはソラに訴える、此処での生活は危険だと、安全な私に家で暮らそうと。その言葉に偽りはなく、カスミの本心からの言葉だ。

「そうですね、同意しますよ、正論ですよ、だけど！」

そんな事はソラ自身も理解している。快適そうに見える廃墟での生活も現状上手くいつているからであり想定外の問題でも起これば廃墟生活は簡単に崩壊する。その問題を理解していながらも此処に留まるのはソラなりの理由がある。

「だつて貴方束縛きつ過ぎるんですよ！」

廃墟と化したビルの中にソラの叫びが木霊する。

「自由に行動できるのは家の中だけ、外出は禁止で玄関や窓は開けられず監獄ですか！おまけに何を言っても取り合ってくれない自由意志の完全否定！そんなの愛玩動物と同じじゃないですか！俺はペツトに堕ちてまで生きたいとは思っていないんです！」

それが都市を離れ廃墟に居を構えるソラの理由、都市に生きる男でソラと同じ考えを持つ者は皆無であろうことは想像に難くない。安全か自由、その二択の中でソラは自由を選んだだけ。だからこそカスミの束縛には耐えられなかった。

「……それが、それがどうだつていうんだ！」

だがソレをカスミが理解する事は無かった。

「死ぬ事も無い、飢える事も無い、寒さに凍える事も無い、殺されることに怯えなくていい！こんなにも恵んであげたんだからお前の全てを求めてもおかしくは無いだろ！」

これがカスミの考え、カスミの本質。他者を理解する事も無く才能で生きてきたが故の弊害。

「だけど私も悪かった、お前の気持ちも知らずにいた事も謝る、だから一緒に帰ろう」

「チクシヨウ、全然反省も理解もしていねえ！」

結局の所、言葉で分かり合うのは不可能なのだ。カスミはソラの気持ちに分からず、相手に押し付けることしか知らない。相手を理解しようとする事に思い至らないのは彼女の生きた人生でソレが必要とされなかったから。

「……分かりました、この場で証明します」

だからソラは示すしかない。カスミにソラがどういった男なのか。

「もう二度とその滅らさず口が言えないよう、ボコボコにします！」

逃げるのではない、貴方の庇護が無ければ死んでしまうような非力な人間ではないと、力をもってして彼女に示す、それがソラを選択。

「……そうか、分かった」

そして彼女も選択する。これまでと同じように。

「だったらもう一度、力づくで連れ去ってやる！」

欲しいものがあれば奪う、それが彼女の本質だ。

交わらないモノ

負ける要素はなにひとつない、それがカスミの予測だった。

廃墟でソラを探すために調達した武装、軍で使っている物に限りなく近い物で揃えた物はカスミの望んだ性能を發揮してくれた。それでも単独で行動する以上携帯する火器は些か増強したものでなければならなかった。アサルトライフルが一丁、大口徑ショットガンが一丁、発煙、閃光手榴弾、サイドアームにナイフにハンドガン。都市の勢力範囲から外れているならば最低でもこれぐらいないと危険だ。

拳銃弾程度であれば無人機に大したダメージは与えられない。だがライフル弾といった貫通力のある弾丸だと無人機の薄い装甲など紙同然、最弱の無人機の名前に相応しく穴あきチーズになつてしまう。それが強装弾であるならどうなるか？答えは単純、アサルトライフルのフルオートを浴びた無人機の装甲は削られ、フレームを引き千切られ、内部機構を砕かれスクラップに代わる。ショットガンのスラッグ弾に至ってはただの一発で胴体に大穴を開けて無人機を屑鉄に変える。

だが真に恐るべきはカスミの魅せる戦技、二丁を上手く使い分け、無駄なく、素早く、迅速に、最小限の動きで無人兵器を破壊し続ける。その力はソラの想定をはるかに上回っている。

「強い、いや違う、上手いなチクショウ！」

火器の強さもあるだろう、それに加えカスミは銃の性能を遺憾なく發揮し、かつ鍛え磨かれた戦技を持ってソラに迫るのだ。その姿は鬼気迫ったものであり、ソラに対する歪んだ執念が一目で見取れる。

「出し惜しみは無しだ！13から24号起動！」

——だからと言ってもう一度捕まるの御免被る。

ソラは現在制御下に置いた全ての無人機を起動する。その瞬間にビル全体から甲高い機械の駆動音が木霊する。音は重なり合い反響し増幅された音がビルを揺らし起動した無人機の数の多さを雄弁に語っていた。時間稼ぎに徹すれば新たな無人機がソラの元に増援に駆け付け——

「させるかあッ！」

カスミは直後懐から手榴弾を取り出し、投げた。放物線を描いて飛んでいく手榴弾の行く先は一本の通路、そこはカスミとソラが戦うフロアに通じる唯一の道。その中に手榴弾は吸い込まれるように入っ
ていき……爆発を起こした。爆風と衝撃波が脆くなつた天井部を崩壊させ、その瓦礫は通路を塞いだ。

「残念……でしたッ！」

目論見通りに通路が塞がったのを確認すると同時にカスミは外骨格の人工筋肉が軋むほどの出力で駆ける。残りの無人機は四体、一体はソラが搭乗する為なのか武装は無し、残り三体を破壊すれば全てが
終わる。

「二体」

満たせなかつたモノが漸く満たされる。そう考えるだけで身体は軽くなる。

「二体」

だがこの落とし前はとうつけようか、もう二度と逃げ出さないようにどうすればいいんだろう。

「三体ッ！」

だけど先ずは抱きしめてその匂いを思う存分堪能してからだ。ほ
ら、もう簡単に手が届くところ――

「……ここで奥の手」

その小さな声が聞こえた瞬間、天井が崩れた。

カスミは融けかけた思考を引き締め急いで崩落に巻き込まれないように距離をとる。そして瓦礫が二人の間に降り注ぐと共にソラとカスミの間に何か落ち、その姿を目にしたカスミは顔を引き攣ら
せた。

「無人二足歩行兵器」

それは軍でも運用している無人機の一種、人間の下半身の様な脚部を持ち、胴体には各種センサーと機銃を搭載するあらゆる環境に対応可能な兵器。人の背丈を優に超えた4 m巨体は並の歩兵など簡単に蹴散らし、追加装備を施すことによつて簡単に強化もできる代物だ。

「凄いなソラ、これが最後の切り札？」

「真正正銘、最後の切り札ですよ。これなら流石に貴方でも勝てないでしょう。だから最後通告です、この場から立ち去って二度と此処に来ないでください。そうしてくれるなら手は——」

「断る」

ソラが最後まで言い切ることは無く、ソラの言葉を遮ったカスミには迷う素振りは何一つ無かった。

「……死にたいんですか」

「そうだね、確かに下手をすれば簡単に殺されてしまうよ」

幾らカスミが優れた兵士であったとしても勝負は既についているようなもの。その事実カスミ自身も認識できているようで下手をすれば死んでしまう事も理解できている。

「でもね、此処でお前を諦める事の方が死ぬほど辛いんだよ」

そんな些細な懸念は此処で引き返す理由にはなりはしない、それだけで踏みとどまれる程度の思いではない。

「初めてだったんだよ、お帰りなさいって言われた事も、一緒に寝た事も、食事をしたことも全部……全部初めてだったんだよ。それが無くなった後はどうにかなっちゃいそうだった。一人は寂しくて、寒くて、悲しくて。でもそれ以上にまた会いたい、一緒に暮らしたいって思いが強くて此処まで来たんだ」

カスミ自身も言葉に出来ない思い、それを表現するには幾分かの間が必要だった。そしてその時間は致命的な隙であり……だけれどもソラは無人機をカスミに仕掛けるようなことはしなかった。ただ黙ってカスミの言葉に耳を傾ける。それは一緒に暮らしていた時と変わらない優しさであり、その思いやりはとても居心地がいいものだった。

「何ですか、ソレ、告白ですか？」

「告白……そうだね、これは告白だよ。ソラ、私は君が好きだ、出会いは最低最悪のものだったけど、この思いに偽りは無い、だからもう一度一緒に暮らさないか」

その思いに至るまでの道筋が酷いものだったと自覚はしている、そ

の思いが何処か歪んでいるのも自覚している。それでもカスミはソ
ラを好きになつてしまつたのだ。

「けど其処に俺の自由はあるの?」

ソラの問いにカスミは答えない、答えられない。

それが答えだった。

「なら俺の答えは変わらない。これが本当に最後です、此処から立ち
去ってください」

「それは出来ない、だからソレも直ぐに屑鉄にして君を攫うよ」

交わらない思いを届けるにはこうするしかない。黒鉄の兵器は動
き出し、銃には弾丸が込められた。

ぶつかる

無人二足歩行兵器、これこそがソラの最後の切り札。ブリキとは比較にならない程の強力な兵器だ。

だがコレを出した、出さざる得ない状況はソラにとっては敗北の一歩手前だ。だからこそ勝たなければならぬ、負ければ今度こそ外に出る事は叶わない監禁生活の始まりだ。

だが現実には甘くはない。

「はッー！」

カスミの放った銃弾が無人機に当たっては弾かれる。火花を散らし、装甲を僅かに凹ませるだけの豆鉄砲が効くわけがない。そんな当たり前のことをカスミが知らない筈がなく、ならば何かしら意図があつてもだろう。それが分からない現状はソラの不安が積み重なっていくだけだ。

だからこそ早期に勝負を着ける必要がある。

カスミを押し潰そうと無人機の脚が迫る。殺すつもりはない——なんて甘い言葉が言える相手ではない。此処までの戦闘でカスミの実力は思い知らされた。殺すつもりで挑まなければ負けるのはソラだ。槍の様に突き出された無人機の脚に当たれば外骨格を付けただけの人間の身体など容易く潰されてしまうだろう。だが、そんな攻撃をカスミは屈んで簡単に避けてしまう。そして避けられた一撃は背後のあつたビルの支柱を只の一撃で砕き瓦礫をまき散らす。

円を描くようにして迫る脚は後ろに飛んで避け、断頭台のギロチンの様に振り落とされる脚は左右に除ける。そして避けられた一撃が床を、柱を砕き壊し瓦礫の山へと変える。その暴力の中をカスミは顔色を変える事無く避け続ける。その顔には焦りも緊張の無く、冷静に身体を機械の様に動かす。

そして避けるだけではなく飛散する瓦礫から逃れると同時にアサルトライフルをフルオートで連射する。無人機を散々に引き裂いてきた強装弾は威力が減衰する事も無く目標に当たるが装甲を貫く事はない。そうしてアサルトライフルの最後の弾倉も使い切り役立た

ずとなった銃をカスミは捨てた。

これでカスミの持つ武装はショットガンだけ、これも弾切れに追い込めば最早カスミに打つ手はなくソラの勝ち。それなのにカスミの顔には何ら焦りも見受けられない、それが溜まらなくソラを不安にさせる。

そしてカスミが胴体部分を狙って一発の弾丸を放つ。弾丸は外れる事無く胴体に直撃、しかし兵器が止まることは無く巨大な脚を動かしてカスミに歩み寄る。

「なるほどね」

だがカスミは距離を取ることは無く、その顔には笑みが浮かんでい

る。「凄いね、コレの直接操作なんて大変でしょ」

「……大したことありません、ラジコンの操作と同じですよ」

「ラジコンにしたらずいしばかり大きすぎない？」

カスミに迫る兵器、その胴体の一部が大きく窪み穴が開いていた。そこは先程のショットガンの弾、大質量を持ったスラグ弾が命中したところだ。だが重要なのは其処ではない、そしてカスミは分かったのだろう、装甲の下に収まっている筈の機材がない事に。本来ならば其処には収まっているのは無人機の心臓部、人工知能を含めたハードウェアは先程の銃撃で壊れている筈。だがカスミの視界に写るのは装甲の穴から見える伽藍洞の胴体だ。

本来ならば動くことすら有り得ない、だが動いているのであれば何らかの仕掛けがあると見当をつけただけ。そして最も可能性が高いのは駆動部を動かす機構しかなく人工知能に代わって何かが機体を操作している。そしてこの場で機体を操作できるのはソラしかない。

「普段の訓練から動きは見慣れてるからね、動きが精彩を欠いていたのもソラが何とか動かしていたから、違う？」

「……本当に厄介ですね、貴方は」

コレが見てくれただけを取り繕ったスクラップ同然の状態を見抜かれた。

そして其処まで分かれれば十分でカスミがやるべきことはただ一つ、このスクラップを完全破壊するだけだ。

追い詰められたソラが兵器を操作、残った間合いを詰めるために駆ける。地響きを立てながら迫り、そして間合いに捉えたカスミに向かい前蹴りを繰り出す。

それをカスミは屈む事で避けた。掠る事も無く虚しく頭上を通り過ぎていく脚はカスミが背にした壁を簡単に貫くだけ。ソラは直ぐに壁にめり込んだ脚を引き抜こうとし——そこにカスミが襲い掛かる。突き刺さった脚を足掛かりにして機体を駆け上がる。そして難なく胴体に辿り着き、空中に飛び上がると共にショットガンを胴体へ向けて発砲。

一発、二発、三発と発生するリコイルを受け止めた外骨格が軋みをあげる。弾丸が装甲を貫き、轟音と共に残り僅かな機構が破壊する。そして胴体を完全に破壊された無人機が断末魔の叫びの様な異音を奏で全ての稼働を停止、カスミが着地すると同時に支える力を全て失った兵器は轟音を立てながら崩れ落ちた。今度こそ完全にスクラップになった無人兵器が動き出すことは無い。

そしてカスミは残った弾丸をソラが乗る無人機の脚に撃つ。轟音と共に脚を撃ち砕かれバランスを崩す無人機、その上に乗っていたソラは振り落とされないように機体にしがみ付き——
「つーかーまーえーた」

そしてカスミの両腕に抱かれる。だがその力は強い、息苦しさと苦痛を感じるほどの力で抱きしめられたソラは腕の一本も動かす事が出来ない。そして動けないようにした当人はソラの首に顔を埋め、その匂いを嗅ぐ。だがそれだけではカスミは

満たされない、ソラの首を自らの舌で舐め、そして噛みつく。

「う、ああ……」

噛み千切られる程ではない、それでも鋭い痛みがソラの首から発せられる。そしてカスミが口を離れた箇所にはくつきりと噛み跡が残っていた。痛みと共に刻み付けたソレを見て漸く満足出来たのかカスミは腕の力を緩めソラと向かい合うようにする。

「ねえ、どうしようか？ねえ、どうしたらいい？今度は逃げ出せないように首輪をしてあげようか、それとも勝手に出ていった罰として酷い事でもしようか？」

もう二度と手放しはしない、言わずとも伝わってくる言葉が分からない程にソラは愚鈍ではなく、そしてソラは負けた。ならばソラの生殺与奪を握るのはカスミ。その事実は確定したも同然だろう。

——だが此処にいる男は其処迄物分かりの良い男ではなかった。

「どれもお断りしますよ」

窮鼠猫を噛む

「ごめんね、ソラ。聞こえなかったからもう一度言ってくれるかな？」
理解できない、何を言っているのか分からないと……なんてことはなく言われたことを理解しているカスミはもう一度ソラへ訪ねる――
「ただし抱きしめる力は強くしながら。外骨格による膂力の増強が無くともカスミは訓練され、鍛えられた兵士である。素の身体能力も高い水準まで鍛えられた力で抱きしめられた少年の身体は徐々に苦痛を訴える。」

「それではよく聞いてください、貴方に飼われるのはいい、や、!？」
それでも恭順することを、飼われることを拒否したソラ。だがその言葉を言い終わる前にさらに強く抱きしめられる身体、圧迫された胴体が呼吸運動を困難なものにし軽い酸欠状態となる。

「ソラ、分かっているの？もう君に打つ手は無く、後は私の思うが儘。此処まで来たら諦めて私に全てをくれれば悪いようにしない。いや、必ず幸せにするから私に任せてよ」

「あ、き、る程言い、まし、たがッ、お断りします！」
意地を張っているだけか、只頑固なのか。それでも此処まで言い切ったのは中々のモノだろう。

「……其処迄意地を張るなら私にも考えがあるよ」
その頑なな思いを溶かし、組み換え、私色に染め上げよう。ああ、考えるだけで滾る、苦痛に、屈辱に苛まれる顔が乱れ、赦しを乞う姿は今迄味わったことのない思いを味合わせてくれるだろう。そしてその過程を丁寧之余すことなく記録として残して――

「男性保護局」

だがカスミの淫靡な想像はソラに一言によって霞の様に消える。
「もし、仮定の話ですけど。貴方に監禁されたと保護局に訴えたらどうなるでしょう」

「ソラは保護局が何のか知っているのかな？通報したらどうなるか分かっているのかな？」

「そうですね、まず間違いなく政府に保護されるでしょう。そして今

後の人生の全てを管理下に置かれて自由は制限される。職業選択の自由はなく、定期的に遺伝子の提供が義務付けられ、配偶者も強制的にあてがわれるでしょう」

貴重な男性を政府が保護、貴重な資源たる人材を公平、平等に分配する、そのための男性保護局。その組織に保護下に入った男性は政府の管理下によって生かさされ、都市の維持、発展に尽くす。其処に入る事がどんな意味を持つのかソラは分かっている。

「そこまで分かっているな——」

「そして貴方に会う事は今後一生ないでしょう」

それが、その一言が止めだった。

「貴重な人材たる男性を不当に占有、監禁、保護局への通報を行っていない。さて、後どれ程の罪状があるでしょう」

ソラが語る罪状、そのどれもが都市においては重罪に当たるもの。それが保護局に知れ渡れば弁解の余地はない——そして、いや間違いなくカスミはソラに近付くことは出来なくなる。

それこそがソラの狙い。

「通報をされる様な隙を与えらるるでも？」

「だけど私は此処まで逃げてきた」

「……そんな事はある得ない。そんな事が出来る訳が……」

「自分は間違いなく保護されるでしょう。そうなれば結果は変わらないう、飼い主が貴方から都市に変わるだけ。そして貴方は犯罪者になる、そうなれば二度と会うことは無いでしょう」

「そんな事はさせない！お前は私のものだッ、都市のモノではない、私の、私だけのものだ！」

つい先程迄カスミが持っていた余裕は完全に消滅し、耳に届くソラの声には余裕が滲み出ている。仕留めたはずの獲物に噛みつかれ、しかも予想外の方向から噛みつかれたとなればカスミには打つ手が無い。

外部から完全に遮断された空間でソラを監禁する——可能性がゼロとは言いい切れない、そのわずかな可能性で何もかも破綻するかもしれない。

此処で一度ソラを開放、改めて準備を整えた上でもう一度捕まえる——そんなことをしている間に逃げられる可能性が大きい。

今迄の積み上げ生きてきた人生を棒にしないようソラを諦める——そんなこと出来る訳が無い!!

カスミの脳裏では幾つもの考えが浮かんで沈んでいく。だがどれもが現状を解決するのに役立つようなものではない。それでも何かを考えつかなければいけない、そうしなければこの温もりは消えてしまい、自分ではない誰かのモノになってしまう。そんな事は認められない、許すつもりはない、だけどどうすればいいのか分からずに——

「これは取引です」

カスミの耳に口を寄せたソラが囁く。

「求めるものは自由、対価は私自身。それさえ飲んでくれれば私はあなたのモノになります」

それはカスミが求めていたものだ。それを手に入れるために此処まで来て、だが手が届く前に消えてしまうと思っていたもの。だがそれを得るには対価を支払わなくてはならない、その対価を認めなくてはいけない。

「……分かった、その取引に応じよう」

「有難うございます」

結局の所カスミが選ぶものは決まっていた。それが現状で最もベターな選択であったことは間違いない。それでも上手く運んだことに笑みを浮かべるソラは憎たらしく、腹立たしい。

「ン!?!」

だからせめてもの嫌がらせにソラの唇を奪う。流石に此処までは想定できていなかったのか傍目にも分かるほどに驚き顔を赤くするのが見て取れる。だがそれでは収まりそうにない。

「ん、んッ!?!」

唇の先、歯を舐め、さらにその先にある舌を味わう。舌同士が擦れ、伝わる感触に陶醉し、それでは足らぬと口の中を舌で蹂躪する。それをどれほど続けたのかカスミには分からない、これ以上息が続かない

と判断して口を離せば目の前に赤に染まり切ったソラの顔があった。呆然とし荒い息を吐いて目には涙を浮かべている。その何とも言えない表情にカスミが見とれていると顔を引き締めたソラが睨んでくる。

「最低です、これ以上の事は絶対にさせません」

「これ以下なら何でもしてもいいの」

「……応相談です、ただし無節操に聞き入れる事はありません」

抱きしめた腕を緩めるとソラはカスミは素早く離れ、そしてカスミの顔を鋭い目で睨みつける。だがその顔で未だに赤くなっており迫力も何もあつたものではない。

「律儀だね、分かった、今はそれでいいよ今は。因みに私の事は好き？」

「嫌いになりかけています。これ以上悪化させないように気を付けてください」

そうぶつきら棒にソラは言い捨てるとカスミの背を向けて歩き出す。拠点としての廃墟を離れる以上は準備しなければならぬ物は幾つもあるからだ。その背中を追うようにカスミも歩き出す、但しその顔はキスをしたおかげが非常に血色がいいものだ。

「分かった、最後に一つだけ、キスは初めてだった？」

「サイテーです」

人の三大欲求は睡眠欲、性欲、そして食欲だツ!!
耐えられませんかっ!

世紀末世界には危険が満ちている。荒野には遺伝子改造された危険生物が繁殖し、何処かの工場では製造段階で致命的なエラーを抱えたまま製造された無人兵器が今も何処かで生産されている。そんな世界において人間が生存するために群れを、集団を、都市を築き上げるのは当然の成り行きだった。

世界に数ある都市の一つ、駿河へスルガは規模でいえば中の下に位置する都市であり、出雲都市連合の加盟都市の中では下から数えた方が早い。その理由は未開拓及び除染未完了の区域が広大なためだ。都市連合の中心である出雲を中心とした都市であれば開拓と除染は完了、加えて軍の定期的な作戦によって怪物といった脅威も駆除を完了しているため住民は裕福な生活を送れる。

しかし駿河といった最前線に位置する都市はそうはいかない。絶えず襲撃してくる怪物といった脅威と戦うため軍事力を優先せざる得ない以上住民の生活は苦しいものになる。其処に都市連合の政治、経済、利権、その他にもドロドロしたもの加われば発展は著しく遅れてしまうのは仕方がないだろう。

その結果として駿河は中央から送られる破綻せず且つ発展に寄与しない程度の援助の元で都市を運営している。

その駿河の都市構造は二層の防壁から成り立っている。中央にある政治機関と都市の中で比較的裕福な者が生活をする上層区。軍や工場と其処で働く労働者や彼らを対象とした商売を行う中間層、そして其のどれにも入る事が出来なかった者達が集まった下層。上層と中間層、中間層と下層には区域を覆うように防壁が張り巡らされており怪物といった脅威から住民達を守っている。しかし下層を覆う防壁は存在しない、彼らの住まう土地と危険地帯と隔てる壁は無く、そこが彼らの住まいである。

そんな下層の端も端、目の前には荒野が広がるという土地に一軒の

建物がある。それは住宅というよりも何かを作っていた工場跡というべきだろう、広い敷地面積に見合った三階建ての建物であり一階部分は柱だけを残して外壁があるだけの伽藍洞であり二階から三階部分に居住部分がある。

そんな広すぎる建物にカスミは住んでいた。それも少々中の悪い友人たちと喧嘩が絶えなかったという昔の悪名のせいで下層にある賃貸住宅の契約が出来なかったからだ。下層にある幾つもの不動産を巡っては断られながらの漸く見つけたのが、万が一お友達と派手に喧嘩をしても大丈夫であり周囲に被害を及ぼさないというこの建物だ。

下層は防壁に守られていないため土地自体は安く建設費がそのまま住宅の価格となる。それに加え中古物件という事もあって予算内に収められたのは幸運だった。

そんな一人が住むにしては大きすぎる家にカスミは一人だけで住んでいた……だがそれもこの前まで、今は彼女の他に一人の住人、まだ少年といえるだろう背丈に短く切られた黒髪を持つソラが加わった。

何やかんや、……非常にややこしい取引をカスミと交わしたソラは現在カスミの家に住んでいる。部屋自体は余っており、尚且つ以前は短時間ながら監禁されていたため家の間取りも勝手知ったるもの、特に苦勞も無く過ごしている。

そんなソラが居間のテーブルに座りながら険しい目をしている。その目が睨むのはカスミ……ではなく彼女との間にある机の上に乗っている物、容器の中に入っている赤緑白と色分けされたペースト状の物体だ。それをカスミは大した抵抗も無くスプーンで掬っては口に運ぶ。赤緑白と順番に食べて水を飲む、その様子を見てソラは我慢できずに尋ねる。

「……コレ、不味くない？」

「そう？」

「昨日も朝昼晩と同じもの食べたよね？」

「明日は色違いにする？」

「いや、それでいいのか!」

タンパク質重視の赤! ビタミン重視の緑! カロリー重視の白! これさえあれば生存に必要な栄養を過不足なく補給できる優れたもの! (味と食感はお察し下さい)

といったペースト状のデイストピア飯に我慢できずにソラは椅子から立ち上がり叫ぶ。生産効率と栄養だけを重視したこの食べ物は人間の三大欲求である食欲を完全に殺しにかかり、食事を栄養を摂取するための作業にまで貶めていた。

「……これしか食べた事ないから不味いとか美味しいとかは分からないかな」

だがこれが無ければ下層に住む者たちは生存できない、カスミにしてみれば当たり前の事だ。その当たり前にソラは耐えられなかった。

「そんなに不味い?」

「香りも無く、不味い以前に味が無い、口に入れば全部ドロドロになるだけで食感なんでもものはゼロ。コレを食べ物と呼んでいいのか甚だ疑問だ」

「工場で作っている合成食はそんなものでしょう。それにソラが考えている食べ物って野菜とか肉とかの高級品で上層の人達しか食べられないものだよ」

「……分かっているよ。汚染地域に畑を作っても駄目になる、汚染を除去したらを土地を怪物から守る羽目になる。戦力も資金も無ければ土台無理な話、結論から言えば土地が限られている現状、狭い土地で大量に促成栽培できるプランクトンで原料用意して工場で作るの合成食を作るのが都市の人口を賄うのに一番理にかなった方法だ」

過酷な世界において土地は重要だ。家を作り、工場を作り、病院を作り、畑を作り……、用途は数多くあり、怪物、汚染といった問題から維持するだけでもコストが掛かり、拡大するならばコストは跳ね上がる。このコストをどうにか出来なければ現状からの劇的な改善は望めないだろう。都市としても現状を維持しているようにしか見えないが、元手が無ければ下手に動けない以上現状を維持するしかないのだ。

「……今度仕事が休みになるのは何時?」

「二日後だけど」

「一度廃墟の拠点に戻って置いてきた野菜栽培キットを回収したい。作り置きしていた乾燥野菜も」

「えっ、あそこで野菜食べてたの? 何やってんの?」

だが既に頭のネジを幾つか無くしているとしか思えない危険極まりないサバイバル生活を送っていたソラが大人しく諦める訳が無い。人の三大欲求、食欲に突き動かされてソラは動き出す。

料理のために畑を作る

廃墟暮らしの中でソラの唯一の楽しみは食事だった。

モンスタービーフジャーキーに始まり保存期間と栄養だけが取り柄の非常食。どう味わつても不味いとしか言いよう無い食材に囲まれていたが最初の頃は問題はなかった。なぜなら比較対象になりうる美味しいものを知らないからだ。それで来る日も来る日もビーフジャーキーと保存食を食べ続けた。

そしてソラは運がよかった。

日課となった廃墟の探索で偶然見つけた廃棄された地下研究所。中に入れば装置の大半は既に壊れており無事な物も電力供給が断たれているため稼働しているのは無い。それでも何かないかと施設の中を無人機に載って探索を続けていると中央制御室らしき部屋に到達した。しかし其処も施設を動かす電力が無いため分何も出来ず只分厚い埃をコンソールを眺めるしか出来なかった。

だが此処まで来て収穫が無いのは避けたいソラは試しにと無人機のバッテリーを施設に繋いでみた。すると埃を被ったコンソールに光が灯るがそれだけ、当たり前前の事だが施設全体を動かす電力には全然届かなかった。それでも施設のデータベースにはアクセス出来るようになった。そこから自身の端末に向けて幾つかのファイルを転送してその日は撤退した。

ファイルの中は一言でいえば宝の山と言えるものだった。地下施設は植物研究所で大戦後の復興を目的として作られたという事から大戦の途中から資金が打ち切られて閉鎖、廃棄された事に始まり、食用植物に関するレポート、栽培方法から活用法にまで及ぶ広範囲のデータが記録されていた。

だがその中で一番ソラの興味を引いたのが研究所職員の私的な記録だった。名前の分からない職員はどうやらかなりの美食家だったらしく大戦で食べられなくなった食べ物や料理のデータを大量に保管していた。いつか大戦が終わった時にもう一度食べるためか再現するためかは分からない。それでもカラフルな写真で記録された料

理をソラは知らずの内に涎を垂らしながら見続けた。

その翌日からソラは研究所の機能を復旧に挑み、それが無理だと分かる個人で可能な範囲での家庭菜園を始める事にした。種は研究所で保管されたものを使い、装置も無事な物を組み立てて栽培を始めた。そして初めての収穫で味わった野菜の美味しさをソラは噛み締めた。

だからこそカスミの家での食事をソラは耐える事が出来ない、故に決意する。

「廃墟にある栽培キットを全部ここに持って来て自前で作ってやるツ！」

幸いにもカスミの家の敷地面積は意外とあるのだ。これだけ広ければ野菜以外にも諦めていた他の品種も栽培出来る、そうすればカラフルなペースト食品だけの食卓から脱却して豊かにな食卓を作れるかもしれない、——いや、絶ツツツツ対に変えてやるとソラは奮起した。

「だからと言って此処までするとは思わないでしょ……」

その結果として伽藍洞の家が今や本物の工場になってしまった。稼働する栽培装置の間を無人機が絶えず移動し、各種センサーが最適な光量と液体肥料を与え、埃っぽい空気は消え植物が放出する匂いに包まれる。今まで美味しい食事とは無縁だったカスミにとっては驚きの連続だった。

「でも。美味しんだよね〜」

そう言つてカスミは手に持った器に入れられたスープを飲む。程よい温かさに加え奥行きのある味とでもいえるのか、単純な味の合成食に慣れ切った舌には驚きの味だったが今や虜になってしまった。これで以前の合成食の味に戻れと言われて戻れる自信がカスミにはない。

美味しいものを食べたい、そんな理由で廃墟からこれらの機材を持ち帰って運用しているのは凄いを通り越して呆れるしかないと考えていたカスミだったが今やその考えは無い。この料理を味わうための必要経費として割り切るのは当然と言えるくらいに考えを改めた。

「さて、ソラはコレをどうするつもりなんだろうね。家の中に納まる程度で済めばいいけど。もし規模を拡大するなら色々入用になるね」
問題があるとすればこれ以上をソラが望むかどうかだ。今はカスミの大きすぎる自宅に納まる範囲での生産だが規模を拡大することは容易に可能である。倉庫の片隅には未だに組み立てられていない装置が幾つかあり、装置自体も恐らく都市で生産可能な物だろう。問題はこれ等を動かせるだけの電力と人員が手に入るかどうかだが規模を拡大するような事が無ければ心配する事も無い。現状の多品種を少数だけ生産する方法であれば自分とソラに限れば不足に陥る事はない。

「明日は仕事に行くけどコレ持ってけないかな？」

そしてカスミにとつての一番の問題がコレを明日持つていけるかどうかだった。

軍では食事を支給しているが内容は酷いもの、全てが合成食で統一され味も変わることは無い。限られた予算で遣り繰りする以上どうしても皺寄せが出るのが避けられない、そうして予算が削られたのが食糧関連であり、合成食しか口にした事が無い軍人達からすれば問題になるようなことでもなかった。それでも一部には自腹で食事を用意する変わり者もいたが。だがカスミはまさか自分がそうなるとは考えもせず、そして今の自分が軍の食事に耐えられるか自信が無い。

だからこそ職場にもソラが作った料理を持つていけるかと考えたのだが、それ以外にももう一つだけ理由があった。それはソラとの出会いを境に読みだした男女の恋物語、その中にある恋人の手作りお弁当にちよつとした憧れをカスミは抱いていたのだ。

だがそれは無理であり、高望み過ぎるとも考えてもいた。以前の自分からは考えられない程恋愛脳を拗らせているがソラとは契約で一時的に結ばれた関係でしかない。家での食事はともかく仕事に行く度に用意してもらえるのはそれこそ出来の悪い三流小説であり、妄想の産物でしかない。

「ほい、はい」

そう考ええていたからこそ翌朝ソラから手渡された物を見てカス

ミは混乱した。

「ナニコレ？」

渡された包みを開けてみれば保温機能を持った容器と水筒が入っていて、試しに中を開けてみればソラが作ってくれた料理が入っていた。

「お弁当、我儘を聞いてくれたからそのお礼。いらぬなら明日からは作らないで——」

「ありがと、ソラ！」

「こら抱き着くな、キスしようとするなッ！」

喜びと興奮でソラに抱き着きキスをしようとするが防がれてしまうといった一幕の後、カスミは上機嫌で仕事場に向かう。

「軍で自慢してやろう」

カスミが口にしたソレはほんの僅かな出来心から出たもの。それがこの後どんな事態を引き起こすかまでは想像も出来なかった。

予想外過ぎるでしよ……

嫌な予感がする。

嘲笑顔で仕事に行ったカスミ、それが帰って来た時には誰の目にも分かる程落ち込んで帰ってきたのだ。この段階でも多少は嫌な予感がするものそれだけ、カスミが不運に巻き込まれたか何かがあったのだとその時は考えた。だが当の本人が此方を見るなり顔を逸らしたのだ、普段から積極的なスキンシップを取る事も無く。

この段階で嫌な予感は確信に変わった、そして不運に選ばれたのはカスミではなく自分なのだと思わざる得なかった。

「ごめんなさいソラ」

玄関から最低限の返事しかなかったカスミが夕食の席で口を開いた。だが開口一番に出てきたのは謝罪の言葉、予想していたとはいえ本心としては勘違いであってほしかった。だが現実逃避しては何事も進展しない、ソラは真剣な眼差しでカスミの言葉に耳を傾ける姿勢をとる。そして最初の謝罪からしばらく間を置いてから再びカスミは口を開いた。

「明後日、軍の同僚が家に来て料理を奢ってくれて……」

「何がどうなってそうなたんのですかッ!？」

「食事していると声を掛けられてね。普段から一人で食べているんだけど、今日食べた物は同僚たちにとっては見慣れない物で味見させてくれと言われたんだ。それで特に考える事も無く食べさせたら思いの外好評で、それを聞きつけた他の同僚達も集まってきて。それで何処で買ったかと聞かれたんだけど……」

「それで俺が作ったと言ったのか？」

「言っていないよ！だけど店で買ったと嘘を付けば明日には直ぐばれるから自分で作ったと言ったんだけど……」

——お前に料理の才能が無い事も馬鹿舌なのも皆が知っていることだ。もう少しマシな嘘を付けないのか。

——見ろよこの料理、合成食以外の食品もそうだがかなり手間暇が掛かっている。うらやましいね、こんな御馳走が食べれるなんて。

ればならない。

「もし馬鹿正直に家で料理を振舞ったらどうなる?」

「人間の三大欲求って知ってる。睡眠欲と食欲と……」

「分かったそれ以上は言わなくていい」

お腹が一杯になったら今度は別の所も一杯にしないと気が済まないほど気が立っているらしい。現行犯じゃないの? 豚箱行きじゃないの? そんなものは本能に支配された野獣には関係が無く、美味しいような獲物は食べ尽くされる運命にあるようだ。

「逃げるのは……無理だな。準備が間に合わないし、第一何処に逃げるのか見当もつかない」

近隣の都市でも片道で数日は掛かる。その為の移動手段と食料、自衛手段も簡単に用意できるものではなく、廃墟の隠れ家に至ってはカスミとの喧嘩で使い物にならない。

現状を表すなら詰みと言えるだろう。そして飢えた野獣に蹂躪されたくなければ大人しく都市に自首するしかなく、それは今後の人生を諦めるのと同じである。だが仕方も無いだろう、流石にソラも嫉妬と殺意に狂った推測だけで此処まで追い詰められるとは予想も出来るはずが――

「ちよつと待ってくれ、カスミは俺の事を一言でも話した、性別も含めて?」

「言っていないよ、それ以前に恐ろしくて喋れないよ」

「つまりカスミの同僚達が勝手に推理して炎上しているだけか……」

嫉妬と殺意に狂った推測にソラは追い詰められているか、現状を冷静に考えてみればカスミの同僚達が勝手に騒ぎ立てているだけ。その中心にあるのは甲斐甲斐しくお世話を焼いてくれる彼氏が出来たのが妬ましいという醜い嫉妬心だ。

だがここで重要なのは内容ではない。これは彼女達の一方的で身勝手な想像に過ぎないのだ。

故に其処を突けばいいと考え、そして頭に浮かんできた策が一つだけある

「今回の事はカスミにしても不本意なんだよね」

「自慢したくないとは言わないけど、自分から積極的に言い触らす真似はしないよ」

「だったら一芝居打とう、勿論カスミにも全面的に協力してもらおうけど」

時間に余裕はなく、直ぐに動き出さなければならぬ。夕食を手早く食べたソラは準備に駆けだしカスミがその後を付いていく。

そして時間は流れ当日の夕方、カスミが同僚達を引き連れて家に帰ってきた。

「お帰りなさい、カスミ」

玄関前でソラは満面の笑みでカスミに話しかけ、カスミも笑みを浮かべてソラに帰宅を告げる。その姿は誰が見ても二人が確かな信頼で結ばれた事が理解できるだろう。だがカスミの同僚達には関係の無い事、寧ろ目の前で出合い頭にいちやく様を見せ付けられた当人たちにはすれば鬱憤物だ。

だからこそ八つ当たりの意味を込めて文句を言おうとし——口から吐き出されることは無かった。

「皆様がカスミの部隊の方達ですね。今晚は精一杯御もてなしさせていただきます」

カスミの背後にいる軍人たちに向かってソラは笑顔で話しかける。その姿を目にした彼女達は顔に驚愕を浮かべていたからだ。

身なりを整え、軽く化粧を施した顔、まだ幼さを感じさせる甲高い声。それでも精一杯背伸びをして礼儀正しく出迎えてくれたように見えるソラ。

その姿は誰が見ようとも可憐な少女であったからだ。

可憐な少女ソラちゃん

ソラの考えた策は至って単純、嫉妬と煩惱に塗れた推理が全くの間違いであったと誤解させるだけ。だがそれを行う場合、同居人であるカスミに了承してもらわなければならないことが一つだけある。

それはカスミが同性愛者だと偽る事である。それも自称するだけでは説得力が無いため同僚達の前で見せ付ける事も欠かせない。男が少ないこの世界では同性愛者は珍しいが一定数は存在する。だがそんな彼女達に世間が向ける目は奇異の視線であるため、見せ付ければカスミに今後向けられる視線も変わってしまうのは間違いない。それをいかに納得してもらうか、難題に違いないと頭を悩ませていたソラだが――

「別にいいよ。皆からは珍しがられるけどそれだけだし」

同意は思いの外あっさり取る事が出来た。ならばと直ぐに実行に移したソラは女物の衣服（骨格から推測されないようにゆとりの大きな服）を揃え着こなす訓練を行う。途中からカスミが化粧も必要ではないかと提案が行われ、妥当であるとソラは判断。カスミが化粧品を取り揃え軽く化粧を施すといった具合に残された時間を無駄なく活用していく。

一連の訓練を行うソラの顔に恥じらいは無い。なぜなら此処で失敗などをすれば明日の朝日が拝めなくなるかもしれないのだから。

そして当日、カスミの同僚達の前に現れたソラは誰が見ようと可愛いらしい少女であった。厚手のワンピースを着こなし、綺麗に洗い整えた黒髪には艶があり、変声期を迎えていない声をシール状の薄い装置で調整、ボブカットに加え幼さを未だに残す顔は可愛らしい。ソラ自身でも舌を巻いたほどの擬態であった。

そして策は成功した。ソラとカスミが抱き合う場面を見せ付けられた同僚達はカスミを同性愛者だと信じきり、ソラをが女の子だとして疑問を抱かせる事も無く思い込ませる事が出来た。

それから先は問題も無く彼女達にソラの手料理を御馳走することになる。空き部屋に机を並べ、その上には現状でソラが再現できる料

理が出来立ての状態で並べられている。そこから漂う香りに釣られ我先にと料理に殺到する女性たちは思い思いに食事を始めていった。「おいし〜」

基本的に実働部隊、それも最前線に配属さる部隊の人間は下層出身者が多くを占める。舌の肥えた上層出身者や中層出身者は大体が軍の幹部が要職に就き実働部隊に配属されているのは殆どいない。端的に言えば舌が肥えていない彼女達にとってソラの出す料理は味わった事が無いものばかりだった。

「それにしてもこれだけの料理をよく作れたね」

「両親が別の都市で飲食店を営んでいたのですが事業に失敗してしまい逃げるようにして此処に来たんです。それでも何とか再起しようとしたんですが……」

「色々あったんだな」

そんな部隊の大半が食事に熱狂している中、隊長と呼ばれた女性は食事もそこそこにソラと会話をしていた。部隊を率いる者としての責任かもしくは只の興味本位か、ソラという人物をよく知るため様々な質問をぶつけてきた。無論それを想定していないソラではない。カスミの協力の元作り上げたカバーストーリーを淀みなく話していき不信感を抱かせないようにしていた。

「はい、両親も死んでしまい私も下層に放り出され、それでも今まで何とか生きてきました。ですが持って一週間くらいが限界でした……」
「んで、うちのカスミが拾ったと」

「どうやらカスミさんの好みだったようで、今は此処に住まわせてもらっています。あと食事を少しでも美味しいものにしたくてちよつとした農場も作ってみました」

「ちよつとした……ね。確かにこういった料理に食べなれていたら此処での食事には困ったでしょうね」

所々で偽る事が無い本音を話したことも効いているのか隊長は訝しむことも無くソラの語る物語に聞き入っていた。

此処までくればソラの策は成功、あともう少しだけ接待を続けていけば部隊の誰もがソラに不信感を持つ事も無く帰っていくのは間違

いない。

「それで、ソラを一目見た瞬間にビビッと来て、そのままお持ち帰りしたんだよね」

「ひゃッ!？」

だが現実はその上手くいくものではなく、予想外の所から問題が生じる事が多々ある。それが今回の場合はカスミのセクハラという形で表れてしまった。

「それから色々あってちよつとだけ行き違いを起こしたけど今でも仲良くやっているよ」

「そ、そうですね、それでカスミさんッ!？」

「なに、ソラ?」

「身体を、弄ら、ないで下さい!」

艶めかしい手でソラの臀部を撫でるカスミ。流石に度が過ぎていたので諫めようと振り返るが当のカスミの顔は赤く、吐く息は酒臭い。恐らく部隊の誰かが持参した酒を飲んだのか歩く酔っている状態であった。これは不味い、此処で諫めた場合酔ったカスミが何を言いつ出すか分からない。もしここで機嫌を損ねた発言をしてお返しとばかりに性別も暴露されては全てが水泡に帰してしまう可能性がある。

だからソラはカスミからのセクハラに耐えるしかなかった、尻を撫で、首に顔を埋めようとも機嫌を損ねないように。

「うわあー、ガチレズじゃん」

「年下が好みでもアレはアウトでは?」

「いやでも、ここ以外に行く当てないでしょ」

「そう考えるとマシな部類なのでは? 流石にアレには引くけど」

「引くどころかドン引きだよ」

「いやほんと人って見かけによらないんだね」

痴態を見せ付けられた同僚達はカスミの変態度にドン引きし、ソラには何とも言えない憐みの目を向けるが誰も止める者はいなかった。それから美味しい食事と持参した酒で満たされた同僚達が一人、また一人と家に帰っていった。

「おい、このカスミに男が出来たほざいた奴は誰だ？」

「コイツです」

「よし吊し上げろ、あとこの後の飲み会の財布にしてやれ」

「嫌だ違う！アタシは無罪だ、それにお前たちも楽しんでいただろ！」
笑いながら帰る彼女達を見送っていたソラはその姿が完全に見えなくなるのと貼り付けていた笑顔を剥がして真顔になった。

「上手くいったが……疲れた」

だがこれで自分の間は正体を探られる心配は無い、それだけでも此処まで苦労した甲斐はあったといえるだろう。無論今後は外出するときには女装をする必要があるが、それは問題ではない。一番の問題は――

「それで、今日のセクハラについて何か申し開きがあるなら聞くけど？」

度の過ぎたセクハラに本音としては声を大にして怒りたい。それでもカスミには同性愛者という性癖を付けた負い目もあり、その時は酒にも酔っていたといたのだ。それなのに此処まで協力してくれた相手に文句を言うのは言いがかりでしかない。それでも一言だけ文句を言うのであれば許されるのではとソラは考え――

「気になっている男の子に女装させて、しかもかなり似合っていて、皆が女と信じきっているけど本当の正体は自分だけが知っていて……。背徳感の中でやったセクハラは最高でした！」

「OK、ちょっと話し合おうか」

余りの物言いに流石にソラの目はハイライトを失った。

転機と呼べるもの

「ソラちゃんはお店開かないの?」

それはいつの間にか家に入り浸るようになったカスミの同僚が酒に酔った口で言った一言。

「なんでそうなるんですか?それ以前に家に入り浸るのは辞めてください」

「そんなことしたら私達あの不味い合成食しか食べれないじゃない!」

「「そくだ、そくだ!」」

「ちゃんとお金を払えば別の物を食べれるでしょう」

食事会をしてからというものの彼女達は毎日の様に家に来てはソラの食事を求めるようになった。無論タダで作ってもらおうとは考えていないのか安酒と食材を毎回持ち込んできているのだ。それでもソラにとっては手間が係る事なのだがカバーストローリーを破綻させないためにも調理せざる得なかった。

持ち込まれた食材と自家栽培している野菜を組み合わせた料理は好評なように作れば作るだけ消えていく。いつの間にか置かれた大きなテーブルには皿が積み重なり、空き瓶が何本も積まれていた。

夕食を食べに来たのか、酒を飲みに来たのか、恐らく両方であろう彼女達の顔は既に赤く程よい満腹感もあつてか既に瞼を閉じている人もいる。流石に翌日も仕事があるそうなので完全に眠りに落ちる前に起こさなければならぬ。

そんな文句を口々に言う彼女達を軽くあしらいながらソラはテキパキと動いていく。

「ソラちゃん、此処で売ってる合成食つてどれも大して違わないのよ。つまり全部不味い」

「味もそんなに変わらないしね。今までは食べられれば十分だったけど……」

「此処で作った料理を食べたらもう無理」

彼女達が持ち込んだ酒類に合うようにとソラが作った軽い摘みを

口に含みながら吐き出すのは下つ端軍人の寂しい食糧事情。彼女達にも人並みの欲求はあり、どうせなら美味しい食事を取りたい。しかし下層で味わえる物は限られており、その唯一の例外がソラが作る料理なのだ。

「——ということでもソラちゃんお店開かない？私はもちろん部隊の皆も常連客になるし軍でも宣伝するけど？」

「考えておきます。ですから其処で眠っている彼女を背負ってお帰り下さい」

そうして飲み食いしてベロベロに酔った彼女達を追い出せば騒がしかった家も途端に静かになった。そうして落ち着ける環境になったソラは彼女達散らかした皿を片付けながら提案された事を冷静に考え始めていた。

「お店か……」

以外にも彼女たちの提案は一笑に付すものではない。そもそも現状、ソラにとっての一番の問題は自由に使える金が無いことだ。基本的に生活費などはカスミ持ちであり、その代わりにソラは家事労働をすることになっている。カスミに頼めば金は貸してくれるだろうが交換条件を突き付けてくるのは目に見えている。

ならば仕事を探して働けばいい、だがそれには性別を偽る必要があり、男だとバレた時に何が起るのか想像がついてしまう。まずもつてろくなことにはならず性別を隠して働けたとしても下層には碌な仕事がない。加えて数少ない仕事を巡って争うのは日常茶飯事なのだ。なにせ日雇い労働にしても無人機を使った方が安くて速く済むからだ。

だが飲食店経営が出来るのであれば収入を得る事が出来るのではないか？

「軍で聞く限りだと需要はありそうだが……、実地調査を行う必要があるな」

翌日、ソラはカスミと一緒に下層の調査を行う事にした。それで分かったことは軍で聞いたことが事実であることと——

「碌な店が……、というか飲食店が全くないんだけど」

「合成食しか手に入らない此処で飲食店なんか出しても誰も入らないよ。食材になりそうなのも合成食しかないし」

「それでも需要は間違いないだろう。俺が考え付くことならば誰かが既に実行に移しているんじゃないや……」

「まず食材が合成食くらいしかない。野菜や穀物は高級品で中層に行かないと食べれないし、手に入れても調理方法が分からない。それに一番の理由は利権かな」

下層に幾つかある食料品店は全てがギャングの傘下である。人が生きるのに食事は欠かせず、加えて食品に掛かる維持管理費用が安く済む合成食は組織にとって安定財源の一つである。なにより貧しい下層の住人が買える食糧は合成食くらいしかないのだ。

「その話だと店持ったら目の敵にされない?」

「下層は幾つかのギャングが縄張りを決めていて、その範囲で商売をするなら上納金は必要だよ。でもソラがお店を開こうとしているのは外縁部で、其処を仕切る奴はいないから大丈夫じゃないかな?それでも目障りには違いないから食料品店は利用できないだろうね」

「当たり前と言えばそうだな。そうなると必要な食材は軍を經由させてもらわないと出店は出来ないな。……それにしてもカスミはギャングについて詳しいのか?」

「昔……色々あってね。縁もう切れているから」

それ以上は聞かれたくないのだろう。顔を逸らしたカスミを見てソラはそれ以上の追及はしなかった。

「それでお店開くの?今でも問題は無いようだけど」

「正直に言えばお金を貰わないとやってられない」

タダ働きはしたくない、何より家に来る度に食事に関する要求が高くなってきているのは無視出来る物ではない。まさか此処で自分が作り上げたカバーストローリーが仇となってしまうとはソラにも予想できなかった。

「だからお金貰って商売することにしたんだよ」

「だったら部隊の皆に伝えておくね」

「宣伝費用は無いから助かるよ。それとお店とは別に俺を鍛えてほし

い」

「なんで？理由はわからなくもなけど」

「ある程度自衛出来た方が良いから。カスミが何時でも傍にいるとは限らないし」

ソラ自身は強いとは言えず寧ろ弱いといっているだろう。下層で生きるには厳しいと言わざる得ず、カスミがいなければ野垂れ死ぬのは間違いない。

「そうだね、手間を惜しんで攫われでもしたら困るし——」

そこでカスミはソラを見る。だがその視線は嗜虐に染まったものでありソラは何を言い出すのが検討が付いてしまった。

「だけど、訓練の際に事故で身体を触っても仕方がないよね？」

「……必要経費です」

その日からソラは家事の他にカスミからのセクハラを含めた訓練を受けるようになった、目標はセクハラを仕掛けるカスミを負かすこと。

それから二日後カスミの家の一角を利用して小さなお店をソラは開いた。店の名前は『青空』、料理をメインにアルコールも提供することで開店初日から軍関係者で賑わうことになった。

——それから一か月後。

「失礼、貴方がソラですね。食材密造の嫌疑が掛けられているので少しお話をいいですか」

ソラは新たな問題に直面した。

違法行為に関するホニヤララ

密造とはひそかに造ること。法律を犯して、こっそりと物を製造すること。脱法行為であり作られる物も法律で規制されているか禁止されている物である。無論法を犯す以上危険は付きまとうがそれを考慮しても利益が出るものが大半である。

そして今回ソラに掛けられた嫌疑である——但し作っているものは危険な薬物でも何でもない単なる野菜である。

それを告げてきたのはスーツを着たカスミよりは年上であろう釣り目の女性だ。彼女は飲食店『青空』に入店するなり手に持ったカバンから端末を取り出しソラに見せつける。画面に写し出された書面に書かれていたのは都市の法であり、それを根拠にしたソラの営業に対する通告であった。

「私は駿河行政部市民生活課三係に所属している岩崎です。今回此方に伺ったのは市民から違法行為をしているとの通報があったからです。此方に書かれているのは貴方が行った脱法行為に関する書面ですが書かれている内容に間違いはありませんか？」

其処に書かれていたのはソラが現在行っている野菜栽培に関する違法行為であり、場所と規模が記されていた。

「……ありません」

「でしたら現時点を以て立入検査を行います。施設に案内していただけますか」

此処まで来れば下手な誤魔化しは通用しないどころか事態をややこしくするだけ、そう判断したソラは女性を連れて店の裏手に回る。其処にあるのは小さな野菜工場であり、それを見た女性は端末を片手に何かを作成し始めた。

その後ろ姿を見ながらソラは現在の状況を理解しようとする。

まず女が話す理屈は分かる。端末に書かれていた事は事実、ソラが知らなかったとはいえ都市の法に照らせば犯罪を犯しているのは間違いない。そして法を根拠にして行政が立ち入ることも理解は出来る。

——だが、それは都市の施政権が及ぶ範囲での話だ。

ソラがいるのは下層、その外縁部である。それ以前に都市の権力が行き渡り法が力を持つ範囲の外側にあるのが下層。此処は都市が見捨てた場所であり代わりに此処を支配するのは暴力と金を持つ者なのだ。そしてソラが店を構える外縁部はその暴力と金さえ見捨てた場所、危険と隣り合わせの土地だ。

故にこの嫌疑には何らかの悪意の元で行われているの間違いはない。都市の上層部ではなくその下、末端程度に収まるようなものにソラは一つだけ心当たりがあった。

「すみませんが突然の事で理解が出来ないですが通報した方を教えていただけませんか。もしかしたら誤解してるだけかもしれないので」「匿名性を維持するために教える事は出来ません」

匿名性を守る為に教えられない、そう言い切った岩崎だが本心はどうなのか。これは十中八九、ギャングと癒着した役人を通しての営業妨害で間違いないだろう。まあ、それだけの利益を出した自覚はソラにはあるが。

「それにしても良い匂いですね。何を作っているのですか？」

「軍内部の売店で売る軽食ですよ。やはり軍人さんは身体が資本なので御鼻屑にさせてもらっているんです。其れに応えるためにも仕込みは大事ですからね」

「なるほど、そうでしたか」

当初の予定では『青空』は夜間のみ営業にするつもりでいた——がソラの予想を超えて店は繁盛してしまった。店の許容量を超えた来客にソラは対応できず、また利用し損ねた軍人達からの要望で夜間以外でも軍内部の売店で販売という形で利用客を捌いていた。

「それで嫌疑を掛けられた私はどの様にすればいいのですか？」

「都市への営業許可書の届け出、食品栽培に関する免許の取得、この二つを行っていただければ問題はありません。しかし通告後から一カ月以内に申請しなかった場合は違法操業として資産差し押さえが発生します。無論申請した場合は別途納税の義務が発生するのでご了承ください」

端末を片手に事情を説明する岩崎の口調には淀みがなく、またソラの質問に関しても打てば響くような返答を返してくれた。その一連の遣り取りを通してソラの中で岩崎に対する信用が上がっていき――だからこそこの如何にも真面目な女性が不正に加担するのかがソラには分からなかった。

「……それとこれから言う事は独り言なのですが」

そう前置きして岩崎の顔は真面目な表情から一転して苦々しい表情で話し始める。それはここから程近いギャングの拠点、其処には彼女の上司の友人がいて様々な便宜を図ってくれる事、その便宜を受けるには少々お金が必要な事、友人を通せば各種申請も通りやすいと言う事だった。

「もし困っているようであれば教えてあげなさいと言われました。ええ、これは頑張っている店主への親切だと言って……」

「そうですね……」

「そうですね、そうなんです。無理矢理ではなくあくまで本人の意思で選択してくださいと言っていましたよ」

苦々しい顔で話す姿で事情は察せられた。納得していない、間違っているとも理解している、それでもそうするしかないのが彼女の立場なのだ。無論ソラに見せた表情が作り物である可能性もある、それを考慮しても場末にある小さな店にまで来て横柄な態度ではなく細部に關して説明をしてくれたのだ。その仕事に対する真面目さは信用してもいいかと考える。

「それでは失礼します」

伝えることは全て伝えたと席を立つ岩崎。その背中が落ち込んで見えるのは気のせいでは無いだろう。だからソラは小さなお椀に出来たばかりのスープを装って差し出す。

「……これは何ですか」

「今調理しているものです。良ければ味見をしてください」

「そうですね、では頂きます」

差し出されたスープに息を吹きかけて冷ましながら口に入れる。下味を整えじつくりと煮込んだスープは野菜の旨味と甘さが出て美

味しく仕上がっているソラの自信作だった。

「うちそうさまでした」

一滴も残すことなく飲み切りお椀を返した岩崎。そうして再び店から外に出ようと扉を開けようとし——背中を向けながら誰ともなく呟く。

「……今の仕事は納得できないものばかりです。それでも漸く手に入れた仕事なんです」

そう言っ店を出ていく岩崎の背中をソラは見送った。

「世知辛いな」

「それでどうするの」

仕事から帰ってきたカスミはソラを抱えながら今日起こった出来事を聞いていた。無論カスミはソラの願いを出来るだけ叶えてあげたいとは思っているが今回はそうもいかない。なにせ相手はギャングであり下手な行動はソラを危険にさらしてしまう可能性があるからだ。

「んん、どうしようか?」

結局の所、岩崎が帰ってからもソラの頭の中では結論が出なかった。

取れる選択肢は二つだけギャングの下に下るのか、否か。税金を支払って都市に尻尾を振る選択肢もあるが申請の段階で岩崎の上司に握りつぶされるのが落ちだろう。

そして上手く事が運んだとしても税金に加え違約金発生が上乗せされた額が上納金を上回るようであれば大問題だ。それ以外も申請で時間を浪費させて資産の差し押さえを行う事もありうる。

「人生、上手くないかな」

「……ギャングに口利してあげようか」

「やめとくよ、辛そうな顔をしているのに頼めないよ」

「……ごめん」

抱きしめる力が強くなったがソラは何も言わない。

カスミはギャングに対して何かしらの繋がりがあつたことは知つていたが口利きが可能な程の繋がりは予想もしていなかつた。だがそれも利用する事は気が進まない、それがカスミに対して気を許している事にソラは気が付かなかつた。

少しだけ回る歯車

何も無い荒野。生命の息吹は限りなく薄く、辺りに広がるのは岩と砂だけの大地。存在し得るのは環境に適応できた僅かな生命体が日々を過ごしている。

だが、場違いにも二人の人間が荒野に立ち、そして何よりも特徴的な装いをしていた。

一人は全身を覆うマントを装備し、僅かに見えるマントの隙間からは装甲を盛りつけた強化服が見える。だが一番目を引くのは頭部に装着されているヘルメットだ。僅かな光を発する小型カメラが4つも付いたヘルメットはキリキリと音を立てながらレンズが稼働し辺りをくまなく見渡している。

そして二人目の人間は輪を賭けて奇怪だ。身にまとっている服は黒い貫頭衣、首から足先まである長さの布を幾つかのベルトで縛り服としていた。そして顔も目はベルトで覆われ手足には移動に支障がない程度の長さを持たせて拘束されている少年だ。

あまりにも荒野に相応しくない格好の二人組であったが、それを指摘するものは荒野には誰もいなかった。

そんな二人の内、ヘルメットを被った人物は内蔵されている無線機で何処かで連絡を取り合っていた。その姿をもう一人の人間は見る事は出来ない、だが塞がれていない聴覚はヘルメット越しに僅かに聞こえる声を捉えていた。

「こちらS7、目的地の探索終了。目標は発見できず」

「了解、現時点を以て現在地における探索を終了。撤収を開始します」

「……はい、撤収に合わせ機体25号を起動します」

通信は終わった、それが意味することを少年は未だに理解していない。

「チツ、今回も無駄足か、移動するぞ」

強化服を纏った人物の後ろを聴覚を頼りに付いていく。これが何

度も繰り返されてきたことだった。

「最低限『鍵』として使えればいいが……」

聞こえてきた言葉の意味は分からない、たとえ分かったとしても少年は何もしない。



出雲都市連合の加盟都市駿河へスルガ、その北東に未発見の遺跡が見つかった。

この場合の遺跡というのは世紀末以前の高度な文明があった時代の建造物というのが一般的な定義である。無論其処に眠っているのは嘗て栄華を極めた時代の遺物、そのため発見後は最寄りの都市に報告する義務があり後の探索、調査は都市と都市の所属する組織が主導する。

発見者には多大な褒章が支払われ都市は失われた技術を取り戻す、双方が特になるような仕組みであるが中には秘密裏に探索調査する違法行為を働く者も少なからずいた。

今回も駿河からは大規模な調査団が派遣され施設の探索調査が行われる——とはならなかった。

それは発見された遺跡が出雲都市連合で数多く発見された倉庫型と同一の特徴を特徴を持っていたからだ。倉庫型は文字通り倉庫であり世紀末以前の物品が保管されていることがある。しかし今回発見されたものは施設自体の風化、損傷が激しく、中に保管されている物は期待できない事。加えて事前の調査で施設規模が小さい事も判明した。

「つまり駿河としては外れが濃厚である遺跡に一応人員を派遣し探索調査しておくかく、という感じ。いや、ソラちゃんがいてくれてほんとに助かったよ」

そう言いながらソラ特製のサンドイッチを食べるのはカスミの同僚で常連の軍人さん。

「いいですよ、その分出張料金はもらってますから」

そしてソラは軽トラックに詰め込んだ調理器具を展開して遺跡近くの車両待機所で昼食を作っていた。

「それで身の振り方は決まった？」

「都市の方に登録しようとしたんですが……」

「駄目だったんだ」

「癒着しまくりですよ。申請は受理してもらえず、担当さんの方が見ていて気の毒でしたよ」

常連である軍人さんは既にソラの事情を知っている。なぜなら青い顔をしたカスミが何とかしようと隊長に相談し、そこから広がっていったのだ。それ以降、隊長を含めた常連達は親身にはなってくれたが結局の所解決策は出なかった。

「うわ〜」

「まあ、不正なんて今に始まったことじゃないしね」

「それでも酷いでしょ」

昼食を片手に都市への不満を吐き出すが、それ以上の行動を彼女達は起こす事が出来なかった。なにせ不正が蔓延る駿河とはいえ自分たちは其の都市に雇用されている軍人。人口に対し十分な職が供給されていない現状、不正を是正しようとするれば上官に難癖を付けられて辞職、最悪の場合不幸な事故にあっってしまう可能性もなくはないのだ。そんな彼女たちに出来る事はこういった調査でもソラのお店を利用することぐらいだ。

「それで数日以内にはギャングの傘下に入るつもりですよ。まあ、常連に軍人がいればそこまで阿漕な取り立てはしないでしょう……、多分ですけど」

ソラも彼女達に職を捨ててまで助けてくれとは言えない。だからこそ出張といった機会を与えてくれた彼女達が払った金額に見合う料理を誠意をもって作るのだ。

「それで調査の方はどうですか？」

「山場は超えたかな〜」

「ありふれた物で目新しい物は無いと思うよ」

いつまでも自分の暗い話題では食事も美味しくなくなるだろうと

考えたソラは話題を転換する。そうすると守秘義務を考慮してか曖昧な言葉で答えてくれたが、言葉の節々から早く面倒な仕事を終わらせたといった思いが滲み出ていた。仕事の愚痴を言いながら食事をする姿を目にしながらソラは遺跡の内部にいる人数分の食事を用意。作り終えたら容器に入れ配達に向かった。

軍用車両が連なる車両待機所を抜けると其処には荒野が広がっていた。何もない砂と岩だけに満ちた荒涼とした荒地、その何もない荒野に一つの大きな岩山があり、それが今回発見された遺跡だった。時間経過による風化で岩肌が崩れ落ちその下から遺跡の外壁が見つかったことが発見につながった。今現在は外壁に穴をあけ其処から探索調査を行っている。

遺跡に入り込めば投光器の光が内部を明るく照らしていた。車両から伸びている電源コードの類に足を取られないように進めば奥に一塊になった集団を直ぐに見つける事が出来た。

「昼食持ってきました」

「ありがとう、ソラちゃん。これで午後も頑張れるよ」

「ソ〜ラ〜」

「くっ付かないで下さい、工作中ですよ」

「大丈夫、休憩時間だから」

業務中にもかかわらず素早くソラの後ろに回り込んで抱き着いてくるカスミ。鬱陶しいと思いつつも慣れてしまったソラは黙々と持ってきた食事を手早く配っていく。

その姿を呆れながらも見る隊長、隊員達も慣れたもの。彼女達にとってみれば実に百合百合しい光景に見えるのだろう。

カスミに揉みくちやにされつつも大変ではあるが充実しているとソラは感じていた。多分この先に待ち受けているギヤングとの厳しい取引も何とかなるだろう、何とかなればいいなく、とも考えているが。

それでもこの何気ない日々が続いて欲しいとソラは願った。

——だがそれは唐突に終わりを告げた。